

悠遊

第三十三号



企業OBペンクラブ

ガリバーの
茸畑に
速いに
込む

中村 晃也



空蟬
抜け
涼した
後には

矢澤 正二

悠遊

第三十三号

企業OBペンクラブ

表紙の絵 「円空トリビュート」(板彫画)

八木 信男

新日本風土記という番組の主題歌は「あはがり」という歌だ。はじめてその歌を聴いたとき下手くそだと思ったが、聴きなれるとこの番組にふさわしいと感じ始めて、真似するのは難しいと悟った。歌うのは朝崎郁恵という奄美出身のプロの歌手だ。

円空さんの作品も展覧会で見て作れそうだと思った。畏れ多くも真似しようとしたが難しい。一体、あの笑顔をなす目のカーブはどんな関数で表せるのかと考えてしまう。

揖斐川町の一心寺にあるというこの観音菩薩立像は円空さんが滋賀県の伊吹山での修行中に作り、檜ヶ岳開山で知られる播隆上人はこの像を携えて全国を行脚したそうだ。



目 次

▽巻頭言	豊澤 幸平 4	▽「映画」の思い出	野瀬 隆平 26
Ⅱ エッセイ Ⅱ		▽酸ヶ湯温泉へのスキー旅行	野上 浩三 28
▽「沈黙は金」か	大津 隆文 6	▽謡曲のおけいこ	新田由紀子 30
▽我が懐かしきクラブの先輩たち	大平 忠 8	▽ワイン談義	中村 晃也 32
▽宗教あれこれ	大森 海太 10	▽大阪と私	豊澤 幸平 34
▽馬車の旅	川口ひろ子 12	▽母の命に寄り添って	浜口須美子 36
▽マイ スーパーヒーロー	木村 敏美 14	▽能『千手』にみる今生の別れ	藤原 道夫 38
▽原爆投下なき日本の姿	荒野 喆也 16	▽マルタ騎士団	松浦 俊博 40
▽後南朝に思いを馳せる	清水 勝 18	▽イギリス再訪	松田 昌康 42
▽ジブラルタル海峡を越えて	志村 良知 20	▽日本の最後の砦	森田 晃司 44
▽利己的な遺伝子と利他的な脳	瀬尾 勝弘 22	▽アルマータに降りたサムライ	吉原 秀東 46
▽高齢夫婦は潮風に乗って	馬場真寿美 24	▽時折の思い出から	安藤 晃二 48
		▽福原遷都と鴨長明	池松 孝子 50
		▽散歩、散策、そして三策	市川 忠夫 52
		▽ライフワーク	稲宮 健一 54
		▽仏様にお任せします	上田 信隆 56

▽一人旅したスマホ……………内田 満夫 58

▽数字合わせ……………荒岡 衛 60

▽クビライ時代のグローバル化……………松浦 純子 62

▽反権力の人 大越 浩平さんを偲んで 矢澤 正二 64

Ⅱ 短編Ⅱ

▽昭和二十年八月九日、長崎にて……………池田 隆 66

Ⅱ 活動報告Ⅱ

▽何でも書こう会……………74

▽サロン21……………75

▽ペン俳句のこの一年 佳句鑑賞……………76

▽ペン川柳……………80

▽ペン・フォト句会……………85

▽英語を読もう会……………86

▽何でも読もう会……………87

▽ホームページ関連……………88

▽クラブ活動を振り返って……………89

▽颯爽と駆け抜けた兒玉さん
 ↳ 兒玉 寛嗣さんを偲ぶ……………瀬尾 勝弘 91

▽今年のクラブ活動より……………92

▽会員名簿……………94

▽編集後記……………96

表紙の絵 八木 信男

アート 安藤 晃二 木村 敏美 瀬尾 勝弘

長尾進一郎 西川 武彦 松浦 俊博

八木 信男 矢澤 正二 (五十音順)

会長 豊澤幸平

私は企業OBペンクラブの会長に本年一月、就任致しました。微力ながら当会の発展の為に取り組む所存です。

当クラブの活動は、エッセイ、掌編小説、俳句、川柳、フォト句、写真などの創作、文芸作品を読む会、英語文献を読む会、時事問題を議論する会まで、非常に多彩です。会員はそれぞれ、自分の好きな分野で活動を楽しんでおります。

それらの活動に加えて、会員同士の飲み会、各地の散策会なども行っており、会員相互が交流、親睦を深めております。

私は当クラブに入会后、毎月の「何でも書こう会」に備え頭をひねり、文書を作成することで脳の活性化に役に立っていると思っております。新しいお仲間と出会えたことも生活のハリとなっております。さらに毎月の会を終えたあとの飲み会も大変楽しいひと時です。

当会は発足後三十七年目を迎える伝統のある会ですが、会員数の減少が大きな問題です。喫緊の課題はお仲間を増やすこと、新規会員に加入頂くことです。

この『悠遊』三十三号を手にとって頂き、面白いな、ちょっと話を聞いてみたいなど思われた方は、お試しても結構ですから門を叩いて下さい。ホームページ(<http://www.obpen.com>)から入って頂いても結構です。女性会員も現在かなりいらっしゃいますので話題も豊富です。

現在、会員の方々も是非ご協力をお願いします。私も会員の方に声をかけて頂き二年前に入会しましたが、入会してよかったと実感しております。

新たなお仲間を増やし、伝統ある当クラブが新たなスタートを切る年になりたいと思っております。

エッセイ



写真 松浦 俊博

「沈黙は金」か

大津 隆文

子供の頃、母の持っていた万年筆（きつと卒業記念か何かに貰ったものと思う）に「沈黙は金」と彫られていた。対が「雄弁は銀」であることも間もなく知った。また、正月に遊ぶカルタの一枚に「雉も鳴かずば打たれまい」とあった。子供心に人はおしゃべりよりも余り口をきかない方が良いのだと思った。

小学生の頃、時々父兄の授業参観があった。教室の後ろから親が見ていると思うと緊張した。ある時学校から帰ると母から「先生の質問にどうして手を上げなかったの、分からないの」と聞かれた。「分かっているけど、当てられると恥ずかしいので」と答えると、えらく叱られた。さらに、たとえ分からなくても「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」と諭された。

とは言うものの、消極的で恥ずかしがり屋の性格がすぐに変えることはなかった。他方、「沈黙は金、雄弁は銀」

という格言も、この言葉が使われた当時は金より銀の価値が高かったので「雄弁」の方が「沈黙」より上、という説があることを知って、複雑な思いがした。

学校生活ではペーパーテストの比重が高く、「雄弁」の出る幕は少ないので寡黙であつてもとくに痛痒は感じなかった。内心「巧言令色鮮し仁」などと強がっていた。しかし、社会人になると状況は一変した。仕事をしていく上で会話が圧倒的な重要性を持つことを実感した。

就職してしばらくしたある日、飲み会の後で上司から「君は少し口が重いと私は心配している」と言われ、本当に自分のことを氣遣ってくれていると嬉しかった。それ以来自分なりに積極的に口をきこうと心掛けたが、持つて生まれた性格は一朝一夕に変るものではない。役人として必須の説得力、論争力は弱いままだった。

今なお集団（グループ）での会話が苦手である。まず、話の展開になかなか上手く付いていけない。こちらの頭の回転が遅いのであるうか。何か発言しようと思うと話題はもう次に移っている。連想力豊富で、打てば響く、当意即妙の世界。NHKの大河ドラマ「べらぼう」を見

でも洒落、地口など会話を楽しむのは日本の文化である。次に、会話に入るタイミングが上手くとれない。発言しようと思っても会話の切れ目が見つからない、途切れたと思ったら他の人に先を越されてしまう。子供の頃皆で遊んだ大縄跳びで、上手く飛び込めなかったのろまでドジな自分を思い出す。

あれこれ言ってみても結局は会話のテーマについての見識が十分でないことに尽きるかもしれない。参加者の博識、意見の組み立て方、記憶力の良さに感心することが多い。遠慮しすぎと言われることもあるが、本当は実力不足であり己の見識を高めるように努力しよう。

個別の対話の世界はグループより少し楽になる。しかし、良き話し相手を得るためにはこちらのあり方が問われる。

社会人当時はお互いが情報をやり取りするような関係が多かった（とくに海外）。情報を一方的に貰うだけでなく、相手の関心のある情報を提供することも大切である。まさにギブアンドテイクの世界だ。

個人的な関係で大切なのは会話者同士の人間的魅力、

ということになるか。個人情報をお互いに知り合うことで親しみの増すことが多い。この点で自分はいづい躊躇する傾向がある。こんなことを言うと、自慢話をしていようにとられないだろうか、もし言いふらされるとちよつと困るなどか。そんな迷いは相手に伝わり、この人は心を開いてくれない、と受け取られてしまう。自己抑制、慎重なものほどほどにしなればと自戒しよう。

もつと大切なのは相手への思いやりであろう。「良き友人を得るためにはまず自分が良き友人たれ」は真理だ。一般的に女性同士は男性同士よりおしゃべりを楽しんでいると言われる。共通の関心事や情報量が広くかつ多いのだろうか。より率直で思いやりも深いのだろうか。見習いたいものだ。

ただし、個人間で深い信頼関係が熟成すれば、会話が弾むか弾まないかはもはや二の次になる。まさに高浜虚子の次の句の世界であろう。

彼一語我一語秋深みかも

それは幾風雪を共に乗り越えてきた老夫婦の境地でもある。そこにはもう金も銀もない。

我が懐かしきクラブの先輩たち

大平 忠

私は、企業OBベンクラブに、二〇〇五年に入会した。当時おられた諸先輩の多くは鬼籍に入られてしまった。薄れていく思い出を書き留めておきたい。

北田純一さん

私が当クラブに入会したときの会長さんだった。不思議なご縁で、私のかつての勤務先の上司と大阪の小学校の同級生と知って驚いた。全てにきちんとされていた方で、クラブの運営についても細かい神経を砕いておられていた。その後知ったことだが、北田さんは三高時代ラグビーのスタンドオフの名手だったとか。

『悠遊』に、喜寿のお祝いをお子さんやお孫さんたち家族全員でやってくれ、こんな幸せなことはない、なんとか八十まで頑張りたいと書かれていた。しかし、翌年七十八で亡くなられてしまった。

石川正達さん

『悠遊』の編集をされていた。以前毎日新聞社で校正の仕事をされていたこともあり、入会したての私の原稿も丁寧に訂正して頂いた。尾道出身で、私の家内も尾道ということもあり尾道の思い出をお聞きしたことがあった。またいつだったか、石川さんが映画『ベンガルの槍騎兵』の映画鑑賞記を書かれたことがあり、私の好きな映画だったので、主演のゲリー・クーパーやフランチョット・トーンについて話し合ったことがあった。

遠藤俊也さん

『悠遊』十五号で「秋篠寺の伎芸天」について書かれたときである。当時私は、『悠遊』の編集をしていた。遠藤さんは、一旦原稿を出された後も何度か訂正され、この原稿に対する思い入れは一人だった。学生時代に秋篠寺に行つたところ、拝観時間を過ぎていて拝観できず、六十三年ぶりによく叶ったと言う内容だった。私は、数年後家内と奈良を訪れた際、真っ先に秋篠寺に行き伎芸天を拝観した。

黒崎昭二さん

クラブの先輩の中で、黒崎さんが一番よく私の家に電話をかけて来られた。いつの間にか拙宅の電話番号を詰んでしまわれた。『悠遊』の原稿のことで、締め切りをチョット待ってくれという話がきっかけだった。何かのはずみに六大学野球の話に始まって応援歌、旧制高校の寮歌の話、さらにお父上が戦死されたトラック島の話まで、いつも私は聞き役だった。そういえば、会員講演の時に、冒険ダン吉の歌を歌われたこともあった。

鳥海 博さん

黒崎さんの次に電話が多かったのが鳥海さんだった。サロン21の常連で、政治や金融について独自のご意見をお持ちだった。しかし、電話は、やはり原稿の締め切りに間に合わない話から始まって、共通の知人の話や、趣味のゴルフの話に移るのだった。

鳥海さんは、資本主義は人本主義で、株式会社は従業員のためにまずあるべきというのが持論だった。子供は、隣人愛と国に誇りを持つ人間に育てよと言われていた。

多田 修さん

二〇〇五年、私が入会して初めての月例会で、どうもお見かけしたことがあるような方がおられた。しばらくして思い出した。私の長女の結婚式でお会いしていたのだった。長女の夫の叔父上だったのだ。

多田さんは、当クラブでIT研究会を立ち上げられクラブのデジタル化に貢献された恩人だった。残念なことにまもなく亡くなられてしまい、お付き合いの時間はたいへん短かった。

関谷裕彦さん

多方面に博学な方だった。海外の海運会社にお勤めされたこともあって、世界の大海戦の史実に詳しくあった。また、西部劇がお好きで、セシル・B・デミル監督の古典的名作『大平原』や『平原児』のカセットをお借りしたこともあった。他方で、日本の古典芸能、特に歌舞伎にもお詳しくあった。参宮橋駅に近い喫茶店の二階でお話を聞くのが楽しみだった。ビールを愛され月例会の後の代々木の蕎麦屋ではいつもビールを飲まれていた。

宗教あれこれ

大森 海太

今から一万年くらい前、氷河期が終つて地球の温暖化により農耕や牧畜が始まり、食糧の供給に余力が生じた。そこから直接労働に携わらない階級が生まれ、従来の自然崇拜から進化した宗教をつかさどり人々を支配した（神権政治）。その後各地の文明の中から様々な宗教が生まれ、それぞれの民族意識を高揚し、また地域間の対立をもたらしした。紀元前十四世紀、古代エジプトのアメンホテプ四世は従来の多神教を廃して唯一神アテン（太陽神）を強要し、その後の一神教の起源とされる。ユダヤ教をはじめとする一神教は他者との妥協を許さぬ強い意識から、今日でも紛争の火種となることが見られる。

迫害離散の苦渋を重ねたユダヤ人は選民思想にもとづくユダヤ教を形成し、その昔先住民を駆逐して獲得したパレスチナを神からの約束の地とした。

第一次世界大戦で英外相バルフォアは、ロスチャイルドからの戦費捻出のためシオニストたちにこの地への入植を認め、その結果イスラエルが建国された。今日ハマス排斥を掲げて徹底攻撃し支配地を抜けようとしたこの国の動きは、宗教の強い裏打ちがあるだけに恐ろしさを禁じえない。いっぽうイスラム諸国の間では、スンニ派、シーア派などの宗派對立があり、イランやタリバンが支配するアフガニスタンではその戒律から女性に対する制限など、今なお神権政治が存続している。

ユダヤ教から派生したキリスト教は当初迫害されたが、その後ローマ帝国の国教となり、一部でゲルマンの民俗信仰と習合しつつ宗派間の抗争を繰り返した。

特にマリア信仰のカトリックと、聖像イコノを否定する東方正教との対立は深刻で、十一世紀には互いに相手を破門する東西教会大分裂シスマに至る。

また十六世紀、ルターの宗教改革が始まると、ヨーロッパ各地で旧教と新教の抗争からユグノー戦争や三十年戦争に発展し、混乱が続いた。その後もアンシャンレジ

ームのフランスでは第一身分の聖職者が特権を有していたがフランス革命で打破され、ナポレオンも政教協約で教会の復権を認めつつ国家へ従属させた。

現在、先進諸国は大多数がほぼ政教分離となっているが、アメリカは未だに宗教国家とする見方もあるようだ。

東方ではインドのお釈迦さまが菩提樹の下で悟りを開いて仏教を創始し、その一部（上座部）は主として東南アジア方面に伝えられた。また別の一部（大衆部）は中央アジア経由で日本にまで伝わったが、これが大乘仏教の源流だとする説がある。伝播の過程でゾロアスター教やヘレニズムの影響を受けた。こんにち真言宗各地のお大師様で行なわれる護摩焚きは、ゾロアスター（拜火教）の流れを汲むものだという説がある。現在ヒンズー教もインドで多くの信者を有しており、イスラム勢と対立しているが、不勉強で詳しいことは知らないので省略。

島国日本では他国との宗教戦争には至らず、織田信長の一向一揆鎮圧や島原の乱を経て宗教はおおむね政治か

らかけ離れた。現在ではオウムや統一教会のような例外を除いて宗教上の混乱は見られない。

私のような無信心者にはよく分からないが、お寺の坊さんがあげるお経はナムアマダブツのほかは日本語じゃないので意味不明、まるで呪文のようだ。仏教本来の輪廻転生という観念はどこかに行ってしまったのか。

いっぽう日本の神様とはどういうものだろうか？ 戒律もない神道は宗教とは言えない、民間信仰に過ぎないという説もある。でもそんなこと、どうだっていいじゃないか。家内安穩、無病息災を祈り、先祖を敬い平和を願う。それで十分だ。死とは何か、死んだらどうなるのか、そんなことA Iに聞いたって分らんだろう。

個人的には結婚式は神前（息子は教会）、盆や彼岸はお寺と、まことにいい加減なものだが、それでも自宅マンションの小さな仏壇に先祖や親類たちの位牌を祀って、毎朝お水を供えている。カミサンは私たちの入るスペースがないので、もっと大きいのに買い替えたいと言っている。

馬車の旅

川口 ひろ子

作曲家モーツァルトが生きた十八世紀末、音楽活動の主導権は貴族階級が握っていた。その貴族に仕え、自己実現を目指して懸命に生きた父子の姿に、後世の私達は深い感動を覚える。モーツァルトが旅先から父に送った膨大な手紙の中には「旅は人の心を豊かにします」という文章が度々登場する。上昇志向の強い父の意向もあり三十五年の生涯で十年以上を旅に過ごしているモーツァルト。特に幼少期、三回のブレンナー峠を越えてのイタリアへの旅は、音楽家としての彼の歩みに劇的な成果をもたらすことになる。

以下はモーツァルトのファンクラブの会員である私の旅の思い出話だ。

「感動の旅の追体験を、しかも当時の様に馬車で」という夢が実現したのは三十年程前だ。熱烈モーツァルテ

ィアンで旅行会社OBのS氏の立てた思い切った企画に私たちは大喜び、十八人が彼のツアーに参加した。出発点はオーストリアの古都インスブルック。ブレンナー峠に向かう道筋にある教会前の広場だ。軽々としたヒズメの音と共に四頭立ての馬車がやって来た。一同二班に分かれて乗り込む。グラッパで乾杯の後ホルンの響きを合図に出発。全行程を馬車で行くのは社会事情の異なる現代では無理な話で十五分間程が馬車、残りは貸し切りバスでの移動となる。

四頭は急勾配の山道を必死で駆け上がる。眼下のインスブルックの街並みや冬季オリンピックが開催されたスキー場の姿がどんどんと遠ざかる。窓から身を乗り出し大声をあげる人、カメラを高く上げ記録に夢中人、万歳をしている人、皆興奮している。ゆっくりとした馬の歩みの後ろにはトラックや乗用車が数珠つなぎ、しかしオーストリアの人々に苛立って追い越そうという気配はない。鷹揚な皆さんは「物好きな東洋人の趣味」に付き合ってくれているのであろう。

目的地に到着だ。役目を終えた四頭の馬を見て驚いた。

全身汗ビツシヨリ、早朝のアルプスの澄み切った大気の中を腰、背中から肩へ、湯気が勢いよく立ち昇っている。車体が外されてトラックに収められた後も蒸発の勢いは止まらない。「汽」だ。辞書によると蒸気、汽車、汽船、汽笛とある。いずれも交通に関する言葉で、この時立ち昇っていた「汽」がこれらの原点かもしれない。私達一行と重い客車を引いて、アルプスの急な坂道を駆け登って全身から勢いよく「汽」を吐いて頑張ってくれた四頭に「お馬ちゃん！ 有難う！」と叫んでバスに乗り替える。いよいよブレンナー峠を越えてイタリアだ。

昭和に生まれて平成、令和、どう考えても冴えない私の人生、強いて探せば一番の収穫は、一番仕事が忙しかった時にモーツァルトに出逢ったことであろう。上役の命令で思いがけず社員四人の下請け会社を立ちあげることになった。時あたかもバブル最盛期、次々に押し寄せた仕事をさばくのに悲鳴を上げながらも、無我夢中で働いた。そんな折、息抜きにふらっと立ち寄った六本木のCDショップでモーツァルトのファンクラブ「モーツァ

ルティアン・フェライン」があることを知り入会、大勢の同好の士が迎えてくれた。ここでの私の収穫は大きく、ついに馬車に乗ってブレンナー峠を越える旅まで体験してしまった。

若い頃から「私なんかどうせ駄目よ！」と自分のマイナス面ばかりに拘って不機嫌な毎日を送っていた。週末には隠れモーツァルティアンと自称し、自室に籠って深夜までCDの演奏を聴いていた。

この「いじけたおばさん」は「夢追いの旅」に出て、大切な何かを捕まえることが出来たのだ。

自分を殺してムキになって頑張るのは止めにした。あるがままの「今」を受け入れてみたところ、私の日常は大変安らかで豊かなものに変わっていったように思えるから不思議だ。

やはり「旅は人の心を豊かにする」のだろうか？

マイ スーパーヒーロー

木村 敏美

夫は理系の短大を卒業し、福岡の九州松下電器に入社したが、九州各県に事業部が設立される事になり、熊本県岱明町の工場に転勤命令が出た。地方での单身生活を心配した父親が、昔同僚だった私の上司に相談にきた事で縁ができ、一九六八年二月二十五日、夫二十五歳、私二十二歳で見合い結婚。

夫は技術課でカラーテレビやビデオ等の開発の仕事を任され、高度成長期の猛烈社員。深夜の帰宅も日常化していた時、漬物の重し蓋を作って欲しいと頼むと、ピツタリの蓋を2πで計算して作ってくれた。数学が苦手だった私は蓋の見事さより計算して作った夫に驚いた。

三人の子供に恵まれたが家族帯同の海外転勤という大きな波がきた。長女は母に預け、小五の長男と小二の次女を連れ一九八三年にマレーシアの最南端ジョホールバルに行き四年程生活した。日本人学校はシンガポールで、

子供達はコーズウェイという橋を渡って国境を越え通学した。マレーシアはマレー人、中国人、インド人という宗教・食べ物・服装も違う三民族が暮らしている国で、夫も現地採用の従業員を指導する事は容易ではなかったと思う。しかし帰国する時は、従業員全員と握手、涙ぐむ人もいて、最後は胴上げされ別れを惜しまれた。

最終的には現地の人達に経営を委ねる事が目的とされていたが、従業員の人達を愛し大切にしたいからではないだろうか、帰国後も現地の会社の人が家を訪ねてくる事も多かった。これは人柄の力だと思ふ。

又、私は家族ぐるみの付き合いをしたインド人にカレーの作り方や香辛料の種類を教えてもらい、帰国後作って友達等に食べてもらうと喜ばれた。もう一つの収穫はインドネシア・バティックという絹つけ染めをシンガポールまで行って中国人に教えてもらった事だ。

一九九二年熊本事業部から福岡松下電器に転勤命令が出て家を建て家族全員同居できたが、夫は五十二歳の時心筋梗塞で倒れ、何とか回復したものの仕事からは少し遠ざかった。定年後、夫は孫達に自分で作った無農薬野

菓を食べさせたいと小高い山の上の土地を買ひ、畑作りを始めたが、自宅から畑迄遠いので、フィンランド製の山小屋を手作りする事にし、二〇〇三年四月に完成。ベランダは自分で設計し、材木を運び、屋根の勾配をルートや三角関数を使って計算し、作りあげた。

訪ねてくれた人達は数えきれない。収穫祭、スイカ割り大会、雪景色や星空も見えるお風呂。夫の手作りの丸テーブルでバーベキュー大会、マレーシアンカレー、ちらし寿司等、背振山や九千部山を見ながらの食事等思ひ出の宝が詰まった二十年間だった。

こんな忙しい中でも電化製品や何かが故障した時はすぐ直し、孫の玩具も手作り、いつの間にか夫の手は「何でも解決ハンド」と言われるようになった。どんな優秀な理系大学を出た人よりも、夫ほど実生活に役立つ事をしてくれた人はいない。理系のスーパーヒーローだ。

二〇一三年、あるきっかけで文章を書くようになった私を見て、夫はネットで企業OBペンクラブを探し、申し込んでくれた。又、私の文をまとめて小さな冊子を作り、中の挿絵にパティックの絵を載せた事で、太平洋美

術会に繋がった。夫の導きで今の私がある。

山小屋から離れた後はパソコンを勉強して地域の友達に教えたり相談にのったり、ダーツやカラオケのお世話等、入院する前迄やっていた。自慢する事もなく、自分も楽しみながら、笑顔と笑い声を絶やさなかった。多民族国家の人達との心の交流や地域の人達とのふれあい、山小屋での交流ができたのは人柄のスーパーヒーローだったからだと思う。二〇一八年には金婚式、二〇二二年傘寿。二〇二三年ペンクラブでパティックの講演会。ここまでこられたのは夫のお陰だ。

しかしある時、進行の速い癌が特殊な部位に見つかり、二〇二五年六月十二日、入院して二か月あまりで他界。子供達、孫達は皆福岡在住で見舞いには毎日何人か来てくれた。最後迄意識はあり、有難うと言ったり、頷いたりしていた。三月三十一日が夫の誕生日。美しいまま散っていく桜のように、精一杯生きて潔く去っていった。夫のように立派には生きられないが、底に流れる温かいものは同じ様に大切にして、苦手な理系の勉強も少しずつして生きていこうと思っている。

原爆投下なき日本の姿

荒野 詰也

もし広島・長崎に原爆が投下されなかったら、日本の降伏は遅れた可能性が高く、その結果として

①さらに大規模な米軍による本土侵攻や絨毯爆撃が行われ、多数の追加犠牲者と都市破壊が発生していた。

②ソ連の影響力が拡大して日本が事実上分割される事態になった。

等が現実的に想定され、どちらに転んでも戦後の日本・東アジアの地政学は今とかなり異なっていたことが想定される。

一、想定される主要シナリオ

シナリオA…米軍の本土侵攻（大規模上陸）

☆事実背景…当時、米軍は日本本土侵攻の準備を進めており、最悪の場合に備えた計画（通称ダウンフォールなど）があった。

☆影響…上陸作戦とその後の都市奪取・掃討戦で、米軍・日本軍・民間人を合わせて非常に多くの死傷者が出た可能性が高い。都市は原爆なしでも既に大規模に破壊されていたが、さらに破壊が広がっただろう。

☆結果の見通し…日本政府・天皇の決断はさらに難しくなり、降伏は数週間～数ヶ月（あるいはもっと）遅れた可能性がある。米占領は成立するが、占領時の被害と人的コストははるかに大きかったであろう。

シナリオB…ソ連の介入による勢力圏分割の拡大

☆事実背景…実際にソ連は一九四五年八月に対日参戦し、満州などで攻勢をかけた。原爆がなければソ連の対日進出が拡大する余地がより大きかったと考えられる。

☆影響…北方（北海道・北東北）や本州の一部にソ連軍の影響が及び、米ソによる事実上の分割統治や緊張が生まれた恐れがあり、ドイツのような分割占領・冷戦化のリスクが高まったであろう。

☆結果の見通し…日本国内で東西に分かれた政治体制が生まれた可能性があり、戦後復興・民主化・経済発展の軌跡が大きく変わったと考えられる。

シナリオC…さらに長期の交戦・内政崩壊↓条件付き降伏

☆影響…原爆の衝撃がなくても、連合国の圧力(空襲・封鎖・ソ連参戦)は依然大きかったため、日本側が最終的に条件付きで降伏するシナリオもあり得た。

☆結果の見通し…降伏条件や天皇制の扱いが今と異なる可能性(例えば天皇退位や処罰、あるいはより厳しい占領政策)も考えられた。戦後改革(憲法、土地改革、財閥解体など)は実施されただろうが、その形や深さは占領の様相によって変わったであろう。

二、社会・経済・国際秩序への長期的影響

☆人的被害…原爆なしでも被害は甚大だが、本土侵攻が行われれば「さらに何十万・何百万」という命の損失が発生した可能性がある。

☆領土・政治体制…ソ連の進出が拡大すれば、東西に分断された日本や、共産主義勢力の影響下にある地域が出たかもしれない。

☆占領と改革…米国による占領改革(憲法制定・民主化・教育改革など)は、それでも一定範囲で行われた可能

性が高い。ただし、占領の主体や範囲が異なれば実施の仕方や優先順位は変わったかもしれない。

☆冷戦構図…日本が分割されたり共産圏に一部入ったりすると、朝鮮半島や中国、東南アジアでの冷戦的緊張がより激しくなり、朝鮮戦争やベトナム戦争への影響も変わった可能性がある。

☆核兵器の歴史…原爆が戦争で使われなければ、核兵器開発・配備の時間軸や政治的正当性が変わったかもしれない(ただし核競争自体は別の要因で進行した可能性が高い)。

三、不確実性は残る

歴史的カウンターフアクチュアル(もし〜だったら)は多くの変数に左右され、専門家でも意見が分かれる。上のシナリオは「もつとも議論される現実的な可能性」を整理したもので、断定はできない。一部でよく示される「原爆のおかげで犠牲者が少なくて済んだ」という議論もあれば、「原爆投下は道義的に許されない」という批判もある。双方の論点(軍事的效果、外交・政治的要因、倫理)を合わせて考える必要がある。

後南朝に思いを馳せる

清水 勝

『何でも読もう会』の十一月課題本は、谷崎潤一郎の『吉野葛』であった。第一章は「自天王」で、南朝、後醍醐天皇、後龜山天皇、北山宮、大覚寺統の親王万寿寺宮、吉野十八郷、三の公谷、神の谷の金剛寺が出てくる。

主人公は「かねてより自天王の御事蹟を中心にした歴史小説を作りたい」と考えていた。ところが案内役の友人津村の親戚が吉野の国栖村に住んでいたことから、関心は津村の母親に移っていく。末尾には「やや材料負けの形でとうとう書けずじまった」と書いている。

そこで興味が湧き、自天王、後南朝を調べてみた。

まずは皇室の正統たる帝の証しであるとされる三種の神器（神璽じんじ、勾玉、劍、鏡）のうち神璽が南朝の復興を狙う後南朝の勢力によって御所から奪われた（禁闕きんけつの変へん1443年）。北朝天皇を擁する室町幕府は、何としても神璽を奪い返し、後南朝を絶滅したいと考えており、

暗殺部隊を幾度となく奥吉野に送り込んでいた。しかし山深い奥吉野の道は近寄り難く、また独自の関所での検問により、よそ者は一切入れなかった。

そんな中で、室町六代將軍足利義教を暗殺した（1441年嘉吉かきうの乱らん）赤松満祐あかまつみんすけの遺臣から、「かつて足利義教を暗殺した赤松家であり、後南朝の下で共に足利幕府を倒そう」との言葉を信用し、よそ者を近づけなかった郷士もすっかり騙され、赤松一族の暗殺団を味方だと思いついて受け入れてしまった。

赤松一族の狙いは將軍暗殺という汚名を返上し、一族の復興を願い、幕府の手こずっている神璽の奪還を図ることであった。そのために緻密な策略を立て、後南朝に入り込み、神璽の隠し場所、二人の皇子の御所状況を入力し、その日に備えていた。

1457年12月2日大雪の降る中、赤松一族によって南朝の皇胤こういんとされる自天王（北山宮、一之宮）と弟の忠義王（河野宮、二之宮）は殺害され神璽は奪い取られた。それを知った「吉野十八郷の者」（吉野の郷民）の追撃により、三の公谷で神璽と自天王の御首級おんしゅきゅうを奪い返した。

しかし、武力で勝る赤松軍の翌年再度の攻撃により神璽は赤松軍の手に渡り、朝廷に戻された（長祿の変）。

こうして後醍醐天皇から始まった南朝、それを引き継いだ後南朝の初代万寿寺宮の血は絶えた。

なお、神璽奪還成功により、赤松政則は加賀半国守護に任ぜられている。

一方の吉野の郷士たちは、後南朝の存立を信じ、自天王的の即位式である朝賀大礼が1454年2月5日に行われたことから、翌年以降その日には「御朝拜式」を毎年欠かすことなく今日まで570年に亘って行っている。

歴史を遡り、なぜ南北朝そして後南朝が生まれたのか。

・発端は後嵯峨天皇が次の天皇を指名しなかったからだ。

・次の天皇を巡って、後嵯峨天皇の息子である後深草天皇（持明院統）と龜山天皇（大覚寺統）が争った。

・鎌倉幕府の執権であった北条時宗は両方の系統を交代で皇位継承するように回答した（両統迭立）。

・第96代天皇となった大覚寺統の後醍醐天皇は鎌倉幕府討幕を計画した。足利尊氏や新田義貞そして楠木正成

も同調し、ついに鎌倉幕府は崩壊した。

・後醍醐天皇は自らが政治を行うとして「建武の新政」を始めた。

・この評判が悪く、足利尊氏との争いが起こり、足利尊氏は持明院統の光明天皇を擁立した。北朝である。

・京を追われた後醍醐天皇は吉野に逃れ、南朝を開いた（1336年）。

室町幕府は天下統一を確実なものにするため、南朝四代目後龜山天皇のときに足利義満の力によって明徳の和約（1392年）を結び、三種の神器は北朝六代目後小松天皇に渡された。ここで南北合体となり、56年間の南北朝時代の終焉を迎えることになった。

その際に北朝と南朝が交代で皇位の継承を行うことになった（両統迭立）が、北朝の後小松天皇が次の天皇に我が子である称光天皇にしたことから、南朝側が反発し、先述した後南朝による御所から神璽を奪う「禁闕の変」が生じたのである。

おそらく『吉野葛』の主人公はこの辺りの後南朝の動きを小説の舞台にしたいと考えていたように思う。

ジブラルタル海峡を越えて

志村 良知

もう随分昔、クリスマスシーズンをコスタ・デル・ソルのトレモリナスという町のリゾートホテルで過ごしたことがある。エクスカーションで対岸のモロッコに渡るツアーがある、と聞いて参加した。バスと船の旅で、ジブラルタル海峡横断も目玉の一つである。

船に乗るのはアルヘシラスという町で、トレモリナスから100km余り西、縄文の槍の穂先形をしたジブラルタル半島とはジブラルタル湾を挟んだ対岸の位置にある。ジブラルタル海峡は長さ約60km、狭い所で幅20km程、漏斗状に開いた大西洋側が一気に狭まる海峡は常に荒れている。

船は素人目にも頼りなく、1000トンも無いように見えた。現在は海峡を直角に横切つてすぐの対岸にタンジェMEDというフェリーターミナルができ、一時間半ほどでモロッコに着くが、当時はタンジェMEDより60

kmあまり西にあるタンジェの港めがけ、海峡を大西洋に向かつてひたすら二時間半進むコースだった。

両岸が見える狭い海峡の中で小さな船は噂の通り縦横上下もみくちやにされる。船に関するかすかな知識から船尾が揺れない、というのを思い出し、最後尾のシートを真っ先に占拠してしがみつく。おかげで家内も酔わなかったが、かなりの修羅場となり乗客の大半はフラフラで下船した。

20人ほどのツアーはもちろん専属ガイド付きであったが、親しくなったトレモリナスのホテルスタッフから、タンジェでは個人でガイド兼ボディガードも雇え、港に元締めがいて手配してくれる、と聞いていたのでそれらしき人影を探す。アラブ衣装あたりを睥睨している恰幅の良い五〇絡みの男と目が合い、話しかけると大当たりで、流暢なフランス語で交渉に応じた。彼がちよっと合図すると一〇代半ばと思われるが、大人びた感じの小柄な少年が現れた。右頬の喧嘩か何かの切り傷跡が一寸凄い。片言のフランス語と単語だけの英語で意思疎通を

確認して採用となった。ガイド料は一日300スペインペセタ（ユーロ以前の話、250円くらい）。

このガイドが実に有能で、まどわりつく路上土産物売りとの間に割り込み、立ちほだかつて守ってくれ、物乞などは身振りだけで撃退、観光ラクダ乗り場では、ほられないよう自分で二頭確保してくれるのだった。

雰囲気たっぷりのアラビックレストランで羊と鶏のスキスの昼食を美味しく頂き、とば口とはいえアフリカの空気に浸る心地良さから、我らのナイトにチップだと500ペセタ硬貨を差し出した。一瞬「まずい」というように困惑して固まる少年。「ボスには内緒。君の素晴らしいフランス語に」と誉めて無理やり握らせる。

張りきったガイド君、ツアー本体から離れて自分とっておきを幾つか案内してくれた。

これは凄い、本物の目の保養だな、というような高級織物店にも案内してくれたが、買う気など全然ない家内がいざ値段交渉でいきなり半値を提案、スーツ姿の店員は「マダム、それはひどい」と、そのあと相手にしてく

れなくなった。

港では友達同士のように握手してガイド君と別れる。夜の航海となったがそれほど揺れず、無事にスペインに戻った。トレモリナスに帰るバスで通過して行く街道の小さな町毎のクリスマスイルミネーションが微笑ましかった。



ジブラルタル波高し

利己的な遺伝子と利他的な脳

瀬尾 勝弘

人は多くの人との出会いを経験し、「人生の師」とも言える存在が見つかることもある。筆者も、これまで「恩師」に出会い、直接の面識がなくても著書やマスメディアを通じて知った著名人のうち尊敬できる人にはその考え方や人となりと共に共感しながら、今日に至っている。「動的平衡」で有名な福岡伸一氏もその一人である。

今般、この福岡氏の訳によるドナルド・W・パフ著「利己的な遺伝子と利他的な脳」（原書は二〇一五年刊行訳書としては集英社より二〇二四年発行）という本を手にした。福岡氏は序文でその内容を分かりやすく紹介している。

一九七六年刊行のリチャード・ドーキンス著「利己的な遺伝子」が我が国でも紹介されたときに、ダーウィンの進化論とDNAなどの分子生物学を結び付けたその理論に筆者も感心した。そして弱肉強食的な自然淘汰の概

念が、DNAという分子レベルでも当てはまることに悲しく感じながらも納得したことは今でも忘れられない。

福岡氏が概説するように、利己的な遺伝子の概念は、「遺伝子とは本来的に利己的なものであり、自己複製こそが至上の目的であり、個体とは利己的な遺伝子が存続するための乗り物でしかない」というものであった。しかし、一方で自然界には利他的な、すなわち自己犠牲的に見える行動は広範に存在する。アリやハチの社会における女王アリ（ハチ）と働きアリ（ハチ）の関係のみならず、人類においても、線路に落ちた他人を自らの危険をも顧みずとつさに助ける、という行動は明らかに利他的である。このような自然界の現象を進化論の学者は利己的な遺伝子の概念を前提にした上で、いくつかの理論で説明してきた。

そのうちの代表的なものに「互恵性」というものがある。それは、利他的な行為も長い目でみれば自分の利益として戻ってくることから、利他も結局、利己的な行為である、という見立てである。福岡氏はこれに関連して日本の二つのことわざに言及している。まず仏教からのこと

わざである。「袖振り合うも多生の縁」(偶然の出会いも巡り巡って意味のあるものとなる)。福岡氏は「袖触れ合うも多生の縁」あるいは「袖触れ合うも他生の縁」と表記している。もう一つは「情けは人の為ならず」(情けをかけることは他人のためだけではなく将来的には自分の利益に戻ってくるものだ)で、いずれも「互恵性」を表しているとしている。

本書では、「互恵性」などの理論も含めて利己的な遺伝子の概念に拘ってはいない。「利他性」は、損得勘定ではなく、脳の神経回路の基礎メカニズムとして備わっていてヒトの素晴らしい資質としての「やさしさと良識」は、オキシトシンなどを介する自発的・主体的な生物学的基盤があり、脳科学的に裏付けられていると考えられている。

昨今の世界各国における国内政治での右派と左派勢力の間の対立や移民受け入れなどについての社会の分断と意見の対立が進む社会情勢や、大国が覇権主義で、また核保有国が核兵器を独占して、周辺国に対して脅迫するような弱肉強食的な国際情勢が横行していることに

は目を覆いたくなる。ウクライナ戦争、イスラエルによるガザ地区での人道を無視した破滅的な攻撃や飢餓状態の強要はその国の利己的行為の典型的な表れであろう。

福岡氏の解説では、同じ利他的な脳を共有する同じホモ・サピエンスであるという共通理解に立って、私たちの社会が今後分断から共生に向けて舵を切ることになることを著者のパフ氏が希望しているということが本書のメタテーマとして読み取れるという。

著者のパフ氏は、ヒトの脳が利他的に行動するように作られていることを「利他的脳理論」と呼んでいる。

利他的とは、言い換えれば他者に対する愛そのものであると言える。

筆者としても、生物としてのヒトの脳にある他者に対する愛が人類をそして地球を救うことになることに期待したい。



高齢夫婦は潮風に乗って

馬場 真寿美

父が亡くなったのは九十三歳、母はその三年後に九十一歳の生涯を閉じた。両親は見合い結婚で、喧嘩をしている二人を見たことはない。だからといって、取り立てて仲の良い夫婦というわけでもなかったと思う。

父は中肉中背のなかなか端正な顔立ちで、面食いの母はそこにやられたらしい。浮気もせず、真面目で誠実を絵に描いたような男、それが父だった。給料はいつもそっくり母に渡し、その使い道に関しても一切の口出しをしない。配偶者としては、なかなかの優良物件じゃないかと思うのだが、母にはそれなりに父に対して色々不満があったようである。

彼らの最後のサポートをする為に、私が実家で一緒に暮らすようになると、母の口から延々と父への不満を聞かされるようになった。父は仕事をする以外、あとの事は一切合切母に丸投げだったので、彼女にとってその重

圧と責任は半端ではなかったのであろう。

父は寡黙で不器用で、一緒にいて楽しいという人間ではない。女性を労わって荷物を持ってくれたり、ドアを開けてくれたりというサービス精神も皆無である。

けれど、以前、足の悪い父に付き添って旅行したとき、父はこっそりと、

「お父さんね、お母さんと結婚して本当に良かったあ。給料もそんなに多くなかったのに、お金が無いなんて言われたこと一回もないんだよ。家も買ってくれたし、財布の中も寂しくなると、いつの間にか足してくれてたしね」と、私に打ち明けてきた。

いやあ、そういうことは本人に直接言っただけよ、と思わず心の中で突っ込んだ。

——全く昭和ひと桁の男は……!!

思った通り、あとでいくら父のセリフを伝えたところで母は信じようとしない。まるで、私が話をでっち上げてるだけでも思っているようだった。

それまで家の中ではコッソコッソと杖を突きながら、父はトイレ・食事・入浴とほぼ自立していたが、ある日、

私が仕事から帰ってくると、立ち上がれないのかベッドの脇にうずくまっていた。急いで救急車を呼んで病院に向かい検査を受けると、肝硬変・高カルシウム血症・肝細胞癌の三点セットで、余命一ヶ月から半年と宣告された。それまでに何度も話し合い、点滴などの延命治療は一切しないこと、最期は家で迎えたいという意向を伝えられていた。なので、病院から家に連れ帰ったものの、数日後には父は完全に寝たきりの状態になってしまった。すると、それまで父とは別室で寝ていた母が、父の介護ベッドの横にズルズルと自分の布団を引き摺ってきて並んで寝るようになった。父は次第に弱り、話せなくなり、終いには目を開けることもなくなっていた。

ついにある晩、痰が絡んで呼吸困難となった。パルスオキシメーターは測定不能。駆けつけた訪問看護師さんに痰を吸引してもらい、どうにか呼吸ができるようになったのが真夜中、ようやく解散となった。「明日は仕事を休まなくちゃ……」と思いがら眠りについた私は、三時頃にふと目が覚めて、父の部屋を覗いてみた。

(……んん?!)

と、目を凝らす。

母がなぜか父のベッドの上にいる。「何やってんの？」と声をかけると、ベッドの横から差し出された父の手に引つ張られたのだと言う。そして朝方、再び覗いた時には部屋の空気は妙にひんやりとしていて、その瞬間、私は父が逝ってしまったことを悟った。母が語るには、父はベッドに母を引つ張り上げたあと、別れを告げるがごとく、彼女をぎゅうつと抱き締めたのだそうだ。

——やるじゃん!!

と感心した。

しかし、お陰で少々認知症の進んでいた母の脳内では盛大な勘違いが起きたらしい。母の記憶では、父と母はまるで世紀の大ロマンで結ばれたことになっていた。それから亡くなるまでの三年間、「早くお父さんのところに逝きたい、逝きたい」と彼女は言い続けていた。

きつと今頃は、船首の甲板で父は母を後ろから抱き締めて、潮風に乗って海原を進んでいつてるんだらうな。

タイタニック号の二人のように……。

「はいはい、勝手にして……。」とつぶやく私である。

「映画」の思い出

野瀬 隆平

初めて映画を観たのは小学生のときである。勿論まだテレビなど無い時代で、映画は最大の娯楽だった。

当時、私は札幌に住んでいた。家から市電に乗っておよそ15分で、街の中心地である四丁目の交差点に着く。

当時としては珍しい大型の百貨店、「今井」があった。多分、その5階だったと思うが、ニュース映画だけを専門に上映する劇場があり、入場料は確か2円99銭だった。一円硬貨3枚でおつりをもらい、満員の館内に入る。いつも満員で、大人たちの後ろでは背伸びしても見えない。そのうちに徐々に前に押し出されてやっとスクリーンを見ることが出来る。

その頃、劇映画の前に必ず各社が製作したニュース映画を上映していたが、そのニュース映画を纏めて観せるのである。甲高い女性アナウンサーの声や独特の響きを持つ男性アナウンサーの声が、今も耳に残っている。

最初に観た劇映画は「ターザン」だったと思う。ワイズミューラー主演の映画だ。森の中を木の蔭にぶら下がりながら、「アー・ア・アー」と奇声を発しながら動き回る画面が今も目に浮かぶ。美空ひばりの映画もこの頃観た記憶がある。タイトルは「悲しき口笛」だったか。しかし、ストーリーはほとんど憶えていない。

映画を観たあとは、近くの繁華街、狸小路にある模型の専門店に立ち寄るのが常であった。鉄道模型に夢中になっていた私は、お小遣いをためて部品を少しずつ買いついて完成させるのである。車体、モーター、次は変圧器とレールと云った具合だ。レールは三本レール。真ん中のレールは集電のためである。実際の汽車は二本のレールの上を走るのに、と気に食わなかったが仕方がない。

映画と云えば、忘れられないのは小学校の校庭での映画会だ。夏の夜、校庭にシートを繋ぎ合わせたスクリーンが設けられそこに映すのである。確か、松竹の「カルメン故郷に帰る」で、主演は高峰秀子だった。白黒ではなく色つき、国産初の総天然色の映画ということだった。東京に引っ越したあとの中学、高校時代は勉強、勉強

と云われて、映画を観るような空気では無かった。それでも、高校時代は息抜きにたまに映画館に行った。二本立ての映画で、外国の映画が多かったような気がする。

卒業して就職したのは重工業のメーカーで、船舶の輸出が担当だった。アメリカの大手石油会社が発注したタンカーの進水式に大勢の招待客が参列した時には、東京から関西にある造船所までお連れする。途中、大阪での大宴会や、祝賀会でのアトラクション手配など、まさに交通公社のような仕事を任された。一連の記録映画を作成し、その映画をホテルで披露映写会を開くなど、本来の業務ではないが、今や良い思い出となっている。

海外の各地で駐在勤務を経験したが、ミラノでは、オペラの観劇が思い出される。事務所の現地所員からのオペラ「マダム・バタフライ」を観に行かないかと誘われた。寒い冬の日だった。所員が運転する車で劇場へと向かう。本物のオペラかと思っていたら、そうではなかった。歌うのは歌手本人のだが、舞台となる背景とオー

ケストラはなんと映画なのである。成るほど、こんな楽しみ方もあるのかと感心した。音楽好きのイタリア人の発想だろうか。

映画で音楽会といえば、ロンドンの劇場でチャイコフスキーの序曲「1812年」のオーケストラ演奏の映画を観た。実はそれに先立って、ロンドンの郊外にあるハムステッド・ヒースで夏に行われる野外コンサートで、この曲が実際に演奏されるのを聴きに行っていた。この時は、屋外なので実際の大型の号砲が最後のクライマックスの場面で鳴り響いたのには、びっくりした。

ロンドンでは住まいの近くに映画館があったこともあれば、しばしば観に行った。どんな映画だったかはほとんど覚えていないが、「E・T」だけは、自転車に乗った子供が空を飛んでゆく場面は覚えている。

シンガポールに駐在している時には、映画「タイタニック」を観た。タイタニック号をテーマとする映画は何本も作られているが、これはデカプリオが主演する映画。船のデッキで両手を広げるヒロインと共に海を見つめている二人の姿が、今でも映像として記憶に刻まれている。

酸ヶ湯温泉へのスキー旅行

野上 浩三

私の出身地の群馬県には、上毛三山と称される赤城山、榛名山、妙義山が聳えています。

そして、その周辺には、多くの素晴らしい温泉郷が形成されています。草津温泉、四万温泉、法師温泉、水上温泉、猿ヶ京温泉などです。

しかし、私が若い頃に行ったのは、この中の草津温泉だけでした。その他の温泉には、戦後の混乱期ということもあって行けなかったのです。勿論、社会人になってからは、これら全ての温泉に行っています。そして、人並みの温泉愛好家になりました。

群馬県は雪国でもありますからスキーを楽しめます。しかし、高校生時代はまだ戦後の復興期でしたので、スキーを楽しむ余裕など有りませんでした。

従って、私がスキーを始めたのは大学生になってから

でした。その際に使ったスキーは、故郷の大工さんが私の大学入学祝いに作ってくれたものでした。

そのスキーを抱えて私が最初に行ったのが青森県の酸ヶ湯温泉です。

当時、この遠方の地までスキーに行くのは容易でないどころか困難なことでした。

その困難を克服することが出来たのは、次のような幸運に恵まれたからでした。

最大の幸運は、級友の一人が酸ヶ湯温泉の旅館と親戚だったことです。旅館に関する全ての手続きを手際よく整えてくれました。滞在費の割り引きも叶えて貰えました。

第二の幸運は、同伴者に恵まれたことです。例えば、酸ヶ湯までの旅は遠距離でしたので普通なら往復とも急行列車を使うところでした。しかし、料金が高額でしたので私は鈍行列車でいくのを希望しました。同伴者は二人でしたが、二人とも快く同意してくれました。

その結果、東京から青森まで行くのに二十三時間を要

しました。しかし、誰からも苦情は出て来ませんでした。私に関しては、むしろ、通路に寝そべて途中で乗車する地元の人たちの訛り言葉を聞く楽しみを得ました。

第三の幸運は時期に恵まれたことです。酸ヶ湯温泉へ行くには道路の積雪が大きな障害になります。私達は五月の連休に行きましたので積雪には邪魔されませんでした。

酸ヶ湯温泉では典型的な田舎の温泉の良さを味わいました。

一方、心臓が飛び出すほど驚かされる経験もしました。私が温泉に入ったのは夕刻でした。従って、湯場は薄暗くなっていました。湯場の入口は男女別々になっていましたので、私は当然男性用の入り口から入りました。ところが、広い湯場に入ってしまった途端に女性と鉢合わせしたのです。文字通り、度肝を抜かされました。

友人が男女混浴のことを予め教えてくれていれば避けられた失敗でした。友人は、悪戯心から意図的に教えてくれなかったのかも知れない、と疑いたくなる心境に陥

りました。

酸ヶ湯温泉のスキー場の滑走路は八甲田山の麓に展開していました。滑走路の左右には大木がそそり立ち、その下には大きなすり鉢状の雪の窪みが出来ていました。新雪が降ると、この窪みが更に大きくなりスキーヤーが落ち込む危険度が高まります。私もそのような窪みに落ち込んでしまいました。その上、逆さまに落下しましたので、正に、蟻地獄の中でもがく蟻同様の醜態を演じてしまいました。

後に、八甲田山雪中行軍遭難事件の真相を知り、己の無謀を反省しました。



写真 西川 武彦

謡曲のおけいこ

新田 由紀子

能の謡曲を習い始めて五年になる。きつかけは、タウン紙で見た「能楽体験募集」という広告だった。見学に行ったら、広いエントランスのある戸建ての二階に、立派な能舞台がしつらえてあるのを見て驚いた。「石神井舞台」といって、能楽はもとより、様々なイベントにも使われているのだとか。三宝寺池に隣接した緑豊かな環境と風格ある邸宅と清々しい檜の能舞台に心が動き、優しく迎え入れてくださった女性能楽師のお人柄にすっかり魅せられて入門を決めた。

それまではしばらく長唄を稽古していた。長唄の前は民謡を少し。とりわけ声がいいわけでも、音感が優れていたのでもないが、三味線の音にのせて調べのよい文句を声に出すのが楽しくて、せつせと楽器の方も稽古を重ねた。しかし、年を経て身上も移ろうと、いろいろと物入りな三味線音楽はうつつしくなる。そしていよいよ

能楽の門を叩いたというわけだ。

能は舞台演劇だから、演じるには所作や舞を行う役者、いわゆるシテ、ワキ、ツレと、鼓、笛、太鼓などの鳴物を演奏する囃子方はやしかた、詞章という物語の筋を謡う地謡じうたい、そして狂言役者などがいる。本来は所作や舞などと一緒に謡を習うものなのだろうが、素人を決め込んだこちらにそれだけのパワーがないので、謡の手ほどきだけをお願いしている。

稽古には、演能の台本ともなる謡本、扇、白足袋を用意すれば、あとは身一つ。謡本は始めに「梅若謡曲教本第一巻」から四巻まであつて十五曲ほど。これを順に習っていく。「鶴亀」「橋弁慶」「羽衣」「竹生島」「富士太鼓」「菊慈童」「鞍馬天狗」など、ワクワクしてくる題名だ。曲の初めには、役割(登場人物)、装束、小道具、持物、季節や謡い方が記されていて参考にする。謡いあげる詞章はほぼ平たく声を出すことばの部分と、節や調子で声を回したり上下させたりする部分があつて、めりはりがある。字面は、流麗にくずした毛筆体で印刷されていて

厄介だが長唄の譜面で馴れていたの、初めからえらく褒められた。いい気になって通ううち、ことばの横に付された符号もどうにか声に出せるようになって、面白くなってきた。教本四巻の次は、一曲ずつの綴じ本を季節や難易度に合わせて選んで指導を仰ぐ。「小鍛冶」「巻絹」「敦盛」「熊坂」「蘆刈」「賀茂」「小督」「花月」「二人静」など、いつの間にか二十曲以上をさらった。もちろん数えをこなしたから上手くなる訳ではないが、能の物語の世界を垣間見る楽しさが増した。

自分なりの謡の楽しみは、物語に出てくる土地の昔の情景を知ること、和漢の古典や文学作品に関連した事物の解釈が深まること、古典上の貴人、天人、亡霊、神官、僧侶、荒武者、里人など、人物を演じて口調や詩句を声に出せること、など枚挙にいとまがない。

『夢の一刻ひとときの物語』ともいわれる謡曲にたちまち魅惑される詞章をあげてみよう。

へ浮きたつ雲の行くへをや　うき立つくもの行くへ
をや　風かぜのこ、ちを訊ねん　【「土蜘蛛」旅の侍女胡蝶】

へこれハ此のあたりに住む者なるが　春たつ山に日を送り　さながら花を友として　山野に暮らすばかりなり
【「吉野天人」里の女、実は天女の化身】
へ不思議やな　はや深更になるまゝに　夜の燈火幽かなる　光のうちに人影の　有るか無きかに見え給ふ
いかなる人にてましますぞ　【「経政」亡霊の出現】
中でもいいのは「賀茂」の曲だろうか。おやしろの境内の流水と川尽くし、ご神体の白羽の矢の神秘的な由来、雷神が現じて風雨雷鳴と共に虚空に飛び去る雄渾さ、目に耳に変化に富んだ鮮やかさがある。

そこここで宝が光るほの暗い森の中を手を引かれ、すり足で歩を進めるように謡曲を習っている。呆れるほど精進のない不心得な入門者である。年齢だからと凶々しく構えるつもりが、尊敬する師は更にお年で若々しく爽と朗らかでいらつしやる。私が習っているのは、観世流梅若謡本ではなく、タウン紙のご縁で出会えた師のお姿かもしれない。

ワイン談義

中村 晃也

かつて勤めていたJ.Vの本社はフランスの古都リヨンにあった。そこは、ボージョレイワイン地帯の南限に位置し、ローヌ河とソーヌ河の合流点にある美しい町である。フランスのガストロノミー（胃袋）と称されるように食べ物美味しく、ポール・ボキユース、リヨン・デ・リヨンなどの三ツ星レストランがある。

ある時、打ち合わせ相手の三人のフランス人に、遅い昼食に招待された。レストランで、早速ワインの選択に入った。私が「ボージョレイがいいのでは？」といった途端、全員が顔をしかめた。「それでは一番良いと思うワインを教えてください」と言ったのが大ディベートの始まりだった。

「せっかくリヨンに来てもらったのだから地元のワインにしよう。ソーヌの河沿いで出来るボージョレイは、北にゆくほど品質がよくなるが、更に北のマコンは格段

にいいんだ。さわやかで、軽くて、日常飲むには最適だよ」「いやフランスのワインといたらボルドー、わけでもメドックが一番だ。この店にはシャトーマルグーが置いてあるからそれにしよう。フェミニンの味といわれて繊細で口当たりがいいんだ」「地元なら、リヨンの南のローヌ河畔で出来るコートロティが日本人向きだと思うよ。香り（ブーケ）も良いし酷もある」

「中村さんどれがいい？」「そんなこと聞かれても。どれも飲んだことがないので判らないよ」と私の返事で三本のワインが食卓に並んだ。それぞれの滷蓄を聴き、試飲と乾杯を繰り返した。そのうちに、どれがどれかわからなくなり、気が付いたら全員すっかり出来上がった。時間もはや四時を回っている。一人が会社に電話し、そしてこう提案した。「会議の続きは明日に回そう。会議室に鍵をかけるように、秘書に電話したよ。今日は最後にコニヤックを飲んで解散だ」

車で送ってくれる彼に、酔っ払い運転で捕まらないかと聞いた。「いや、ワイン一本までは大丈夫。この時間はボリスも絶対飲んでいるよ」

翌日は正式のディナー会で、会場となる本社の接客施設は古い農家を改造リニューアルした、褐色の石造りの建物で、葡萄畑地帯を一望できる丘の上にあった。料理が抜群で誰もが招待されることを願っていた。

そこには、各主要国のカントリマネージャーが主賓として招かれ、本社の部長級の人材が居並んでいた。

そこでの食事会で私の隣に座った開発部長の襟元には貝殻の形をした1センチほどの金の襟章が目についた。

「これはなんですか？」と聞くと、よくぞ聞いてくれたといわんばかりに長々と説明がはじまった。

「これはボージョレイワインのテイスターの印章だよ。毎年十月末になると、私を含めた六人のテイスターが今年のワインの試飲をして、私たちのコメントによって部屋の隅に陣取った卸商がその年のワインの価格を決めるのさ。私はこの地方では名士の一人なんだ」

「ワインのテイストってどうやるの？」私の質問に彼はこちらに向き直って長々と説明がはじまった。

「テイストは五感全てを使うのさ。色、透明度、澱の有無、グラス壁に上がった蒸気の量と香り。これには鼻

をグラスに突っ込んで胸いっぱい吸い込むのさ」

「中村さん、もつと鼻をワインに近づけて」と彼はまさに嗅ごうとしている鼻の低い私の頭を上からぐつと押さえつけた。

「ワインを少量口に含んで体温程度に調整してから、舌の両側に移して苦味がないかをチェックする。次にうがいをするように咽喉の奥に運んで刺激の有無をみる。最後に一気に飲み込んで鼻に抜ける不快感の程度を見るのだ。この感度は科学機器のガスクロメーターより敏感だよ」

化学専攻の私を意識しての、彼の説明の最中にも、えり抜きの料理はドンドン運ばれ、我々二人以外のものはせつせと平らげ、デザート後のコーヒーを飲んでいるが、我々の前は手付かずの皿がずらりと並んでいる。垂涎ものの料理をスキップして、コーヒーしか飲めなかった私はこう言っちゃった。「メルシー、良くわかったよ。でもワインの話も頭にこない程度の長さがいいね」

「おや、日本人のエスプリもワイン並みだね」。長くなるので、これはエスプリなのかどうか質問はしなかった。

大阪と私

豊澤 幸平

ゴルフ好きなので近くのTゴルフ場によく行くが、時々見知らない方と一緒する。朝の出だしの一番ホールのティグラウンドで「豊澤です。初めてお目にかかりますが、今日一日もよろしくお願いします」と挨拶をする
と、「豊澤さんは大阪、関西ご出身ですか」とかなりの確率でかえってくる。普通にしゃべっているつもりだが、すぐばれてしまうらしい。

大阪生まれ、大阪育ち、大学も大阪。大阪を離れたくないので当時、大阪に本社がある会社に就職した。最初の十一年間は大阪勤務。このまま大阪で人生を全うすると思っていた。しかし、こともあろうか本社が東京に移り、やむなく横浜に住まいを移した。転勤時の大阪での送別会のあいさつで、不覚にも大粒の涙を流した。当時の同僚と時々会うとそれを冷やかされるが、「感動しました」と持ち上げてくれる人もいる。

ところで昨年二〇二五年は、大阪にとり五十五年振り、二回目の万博の開催という歴史的な年であった。今回も成功裡に終了したらしい。私の会社員生活は五十三年なので、万博から万博、とほぼ重なることになる。大阪のことは今でも大変、気になる。「大阪、頑張つてや」といつも思っているが、大阪のこの五十五年の変遷はどのようなことであろうか。

経済面では東京に大きく遅れをとった。一九七〇年前後は大阪経済のピークといわれ「大大阪」として全国経済の中心であった。一九七三年のデータでは、域内総生産（GRP）は、東京は二十兆円、大阪のそれは十二兆円、と大きな差はなかった。しかし二〇二二年は、それぞれ百二十兆円、四十三兆円であり大きく水をあけられた。本社機能や金融機関の東京への集積、産業構造が旧来型産業の比率が高く産業構造転換が遅れたこと、グローバル化の対応が遅れた等が指摘されている。今後は知識集約型産業への転換、ライフサイエンス（医療・バイオ）、環境ビジネスのハブの形成等が期待される。

一方、都市としての魅力では、経済誌『エコノミスト』の調査部門エコノミスト・インテリジェンス・ユニットが発表した『世界で最も住みやすい都市、二〇二五年版』で、大阪は日本のトップで、世界の第七位に入っている。安定性、医療、文化・環境、教育、インフラをスコア化している。因みに世界の第一位はコペンハーゲン、東京は第十三位。

実感として大阪は「住みやすい街」であると思うが、世界的な機関からそういわれると「そうやろ！」と嬉しくなる。

大阪弁の響きやイントネーションも比較的うちとけやすい言語である。会話の内容も、ボケと突っ込み、言葉のキャッチボール、話相手をなんとか笑わせようとする努力も絶妙で独特である。大阪人はローカルであることを認識、意識しているが変えるつもりはない。

大阪は、訪日外国人観光客が訪れたい都市の一つになっているが、サービス精神が受け入れられるのであろう。これらの文化面や日常生活よりは、この五十五年間も変わることなく受け継がれている。

さて、個人的なことに戻ると、昨年、大阪を巡るある決断を行った。大阪を去って四十三年、生まれ故郷の諸々をこの間も維持してきた。両親が住み自分が生まれ走り回った地元とのつながり、またご近所の方々との往来を一旦切るかどうか、この四十三年間、悩んできた。

しかし昨年喜寿を迎えたこと、子供たちにとって縁も薄いこの地元との関係を今後も維持することは重荷になるであろうと考え、諸々の処理をとうとう行った。すつきりした反面、今でも多少悩んでいる。京都出身でほぼ同じ境遇の知人がいるが、彼と話をして心のひっかかりは少し薄れた。

とはいうものの、お墓はそのまま大阪に残した。昨今、お墓の移転や墓じまいも多いが、私は今回これには手をつけなかった。先程の知人は墓も整理したとか。

私の優柔不断なところが出たのかもしれない。お墓参りを口実に大阪に行くことが出来る、友人達と時々会うことが出来ると考えたのも事実である。東京も横浜も好きだが、大阪は私にとって切って切れない腐れ縁の街と噛みしめている。

母の命に寄り添って

浜口 須美子

母は神様から「百歳を元気に生きる旗頭」という使命を与えられ、その人生を生ききったと言えます。

「シヨベルカー草に顎のせ八月尽」

夏頃に、こんな俳句を詠み「私には九月はないような気がする」と言い出しました。「八月の終わり、作業中のシヨベルカーが草の上で休んでいるように見えるけれど本当はもう動かないねん」。なんとも不思議な俳句で「変な俳句やね」と言いながらも気にも留めませんでした。実際、おしやれな母は、イヤリングとスカーフは必需品で、いつも通り変わりなく元気できれいでした。

「美味しいものが食べたいねん。高いものが食べたいのではないけど、たまたま美味しいものは高いねん。食べたいものは喉を通るけれど、他のものは喉から脇道に反れてしまうようやねん」と食事の不具合を言うようになり、でも大好きなステーキや鰻はしっかり食べて、食

に対するわがままかなと思っていました。その意識を緩める薬が処方され、薬の影響で寝る時間が増え、元気だった母がベッドの生活になったのが十月初め。ケアマネとの話し合いがあり、訪問看護の医師、看護師、ヘルパーの態勢が整い「看取りは家庭でされますか？」などと突然に命の終わりを意識するような話があり、私にとっても青天の霹靂、勝手に走り出した乗り物に乗っているようでした。コロナの頃だったので、病院や施設に入ると会う機会もなくなるし、訪問看護の看護師やヘルパーの全面的協力の話を聞いて母の最期を自宅で看取る決意ができました。まるで母がリーダーで、みんなで母が寿命を生ききるまで、心地良く過ごすことができるように結成されたチームのようでした。朝八時のヘルパーに始まって、最終チェックの看護師まで『チーム富貴子』は、一日に十名以上の出入りがあり、私は鍵を開けてご挨拶するだけの門番状態、そして病室で過ごすお見舞いの家族という役割でした。起きている時の意識はしっかりしていて、携帯電話での兄や姉との会話を一番の楽しみにしていました。兄には「世話をかけている同居のお婿さ

んに、あなたからお礼を言っただけでいいね」と言いながら「あんたは口下手やからやっぱ私が言うわ」と冗談のような本気のような、しつかりした口調で話していました。母の百歳を記念して作った年表とアルバムを部屋に掲示することで、出入りする人たちと母との話題も広がり、私も母が百歳を超えて高齢だということだけで尊敬されるのではなく、母のこれまでの生き様が魅力的であることをお知らせできて満足でした。

そんな時、足先に血栓が起き、医師は「本来なら入院治療が必要だが、自宅で痛み止めの麻薬のシールを胸に貼って対応しましょう」と言われ、延命治療はせずに、お花が枯れていくように命の終わりを見守ることが自宅で看取るといふことなだと理解しました。その間、看護師の指導で「眠っているように見えても、耳はしっかり聞こえてられるから、いっぱいお話ししてください」と言われ、足が血栓で紫色になった時、私はそれを、母の最期の合図だと感じ、ベッドの横で、手を繋ぎながら、母の大好きだった森山良子さんの『今日の日はさようなら』を夫と一緒に歌いました。「もう無理しないでいい

からね。私は大丈夫やから、ママがパパのところに行きたいって思ったら行っていいよ」と言いました。それから間もなく、気づいたら母は静かに永遠の眠りについていました。嚙下に問題が起きたしてからひと月、足に血栓が起きて二日目、自宅で看取るとは、母の気持ちに寄り添うこと。そして、寄り添う原動力は、訪問看護に携わる医師、看護師、ヘルパーの人の命を扱うチームのプロ意識に私が身を委ねて、お任せすることであると感じました。

母に一番近い私が、安心して過ごせることで、母の日常が守られて、自宅で最期まで生きることができたのだと思います。生命の終わりを見つめることは、恐怖に近い心細いものだと思っていました。自宅で看取るといふ親孝行ができたのは、訪問看護のチームに支えられたからこそだと言えます。

母と私を支えてくださった方たちに今、改めて感謝するとともに、百一歳と十一ヶ月を元気に生き抜いた母の最期をここに書き残します。

能『千手』にみる今生の別れ

藤原 道夫

ここ三十年間、年に四、五回能を観てきた。重複があるにしろ、相当数の演目を観たことになる。自然と好みはつきりしてきた。『千手』は最も心惹かれる一演目で、重衡しげらと千手せんじゅの出会いと別れの心情が濃密に演じられる。

三位中将重衡（清盛の五男）は平家一門の中でも花にたとえれば牡丹といわれ、『平家物語』の所々に華やかに登場する。反抗する興福寺を攻める際は、総大将として華麗な鎧兜姿で指揮をとった。結果、南都焼き討ちの責を負うことになる。源平合戦で身は一変、都落ちした後に一の谷で生け捕りにされ、鎌倉の頼朝の許に護送された。卷十「千手の前」に鎌倉での出来事が記されている。先ず重衡は頼朝と対面し、南都焼き討ちの経緯を問われる。それは清盛の命でも自分の意志でもなく、結果として起こったことで不徳の致すところ、と毅然と釈明し

た。居並ぶ源氏の武将もその態度に感心する。勝者の頼朝は余裕綽々、家来の狩野介宗茂むねもちに預けて手厚くもてなす。宗茂は心根易しい武将で、先ず風呂を用意して重衡に長旅の疲れを癒して貰う。この時頼朝の心遣いにより、年頃二十ほどの娘千手がやって来た。娘はてきぱきと重衡の湯あみを手伝う。その優美な物腰に感心した重衡は、気を許して出家したい旨頼朝に伝えてくれと頼む。

ある雨の夜、宗茂は重衡を慰めようと酒宴を催す。

この「千手の前」を原本として、金春禪竹こんはるぜんちくにより能『千手』が創られた。能では千手がシテ（主役）、重衡はツレ（準主役）、宗茂がワキ（脇役）を演ずる。

先ずワキ宗茂が登場し、頼朝の命により重衡を預かっている旨述べる。続いて千手について「手越（現静岡市内、安倍川の畔）の長が娘なるが、優にやさしく候により：頼朝より遣われ候」と紹介する。シテ千手が登場して重衡の身を案じ、さらに雨の一夜を慮る。宗茂と二人して重衡の許を訪ねると、部屋の中から声が聞える。「身はこれ槿花ぎんか一日の榮、命は蜉蝣ふゆうの定めなきに似たり

「とわが身を嘆き、今夜は対面できないと言う。頼朝の依頼により琴と琵琶を携えて来たのです、と千手はきりりと妻戸を押し開き部屋に入つてゆく。その時目についた重衡の印象は「御簾の追い風匂い来る、花の都人」だった。重衡が問う、先日あからさまに申した出家の暇のことを聞かせて欲しい。千手は残念ながらその事は叶わなかつた旨答える。重衡は囚われの身をさらに嘆く。

宗茂の音頭で酒宴が始まるものの、重衡は心を閉ざしたまま。千手は道真の詩の一節を謡う。

羅綺の重衣たる 情けなきことを 機婦に妬む

三人ともども「ただ今詠じ給う朗詠は、忝くも北野の所作、この詩を詠せば聞く人までも、守るべしとの誓なり」と漢詩の意味を解く。重衡は「さりながら今生の望みなし」と嘆きを深くする。

以降はシテの独壇場となり、救われない運命の重衡を何とか慰めようとする。「灯火暗うしては、数行虞氏の涙の、雨さえしきる夜の空 四面に楚歌の声の中」。そして

一樹の蔭や一河の水 皆これ他生の縁

と白拍子を謡い、舞う。重衡の心も次第に打ち解けて杯

を傾け、琵琶を引き寄せて弾じ、千手が琴を合わす。シテに続いて地謡が「合わせて聞けば 峯の松風通い来にけり、琴を枕にうたた寝、夢も程なく、東雲もほのほのと、明け渡る空の あさまにもなりぬべき」と謡う。この場面は能の作者の創作。夜が明け酒宴は終わる。

日が登る頃、重衡は勅により南都に送り返される。「千手も泣く泣く立ち出で なに中々の憂き契り、はや後朝きぬぎぬに引き離るる、袖と袖との露涙、げに重衡の有様、目も当てられぬ気色かな」。これが今生の別れの場面となる。舞台で両者は袖が触れ合う距離で行き交う。シテはツレが下がるのを見送りながら、悲しみを表すシオリの所作を留めて能が終わる。

能を観て千手と重衡の交流に心打たれると同時に、何か重い課題を負わされたような気分になっていった。

『平家物語』には後日談が記されている。重衡は南都近く木津川の河原で斬首された。享年二十九。これを知った千手は喪に服して弔いながら弱り果て、間もなく亡くなってしまう。

マルタ騎士団

松浦 俊博

ローマを訪れると必ずアヴェンティノの丘に行く。目の前にはテヴェレ川が流れ、麓には「真実の口」で有名なサンタ・マリア・コスメディアン教会や、馬が引く戦車の競走が繰り返されたチルコ・マツシモがある。観光地の喧騒から離れたこの丘に至る道には日本ではほぼ見られない大きな松ぼっくりがたくさん落ちてい。四つ五つ拾うと、ビニールの買物袋がいっぱいになり立派な飾りになる。坂道を登ると、サヴェツロ公園があり、そこに吹く心地よい風とテヴェレ川対岸の眺めは、登ってきた甲斐があったと思わせるくらい素晴らしい。さらに進むと、マルタ騎士団総長の別邸にたどり着く。ローマでは、この騎士団の独特な十字形の紋章を付けた救急車を何回か見かけていたので、医療関係の仕事をしているかと思っていた。「マルタ共和国」と関係があるのか興味を湧いた。

この騎士団は正式名を「エルサレム、ロードスおよびマルタにおける聖ヨハネ主権軍病院騎士修道会」と称して、ローマ教皇を頂点とするカトリック組織に属す。領土はないが主権のある国家で、国旗と紋章を有し、国旗は赤地に白十字でデンマークやスイスの国旗に似ている。紋章は矢車みたいで、風が吹けばくるくるつと回るような十字形になっている。

オーストリア、ドイツ、ロシア、ウクライナ、スペイン、エジプト、タイなど宗教・宗派を越えた百以上の国家と外交関係を持ち、在外公館には治外法権がある。日本やアメリカなどとは外交関係はない。また、EUのように、国際連合総会の常任オブザーバーの資格を一九九四年に付与されている。ローマのコンドッティ通りにあるマルタ宮殿に政府を置き、元首である騎士団総長の公邸を兼ねる。アヴェンティノ丘の建物は総長の別邸で、騎士団の議事堂や礼拝堂として使われている。

波乱に満ちたマルタ騎士団の歴史は、最初の十字軍がイスラムに占有されていたエルサレムを攻撃した十一世

紀末に始まる。エルサレムには、キリスト教の修道士ジエラルドが運営する聖ヨハネ病院があり、宗教の差別なく献身的に医療を施し、巡礼者の休息場を提供していた。この病院がマルタ騎士団のもとになりジエラルドが初代総長になる。十二世紀初めに病院は教皇から修道会として正式に認可された。その信念は「われらの主、病者と貧者」。始まりは病院組織だったが、次の総長から「キリスト教の戦士として戦う任務」も追加され軍事組織「騎士団」の性質が勝るようになる。

イスラムとキリスト教との戦いは十七世紀頃まで続き、騎士団は拠点をまずエルサレムからアッコンに、十三世紀末にはキプロス島に、十四世紀初めにはロードス島に移した。エーゲ海を行き交うイスラムの交易船を襲撃して略奪しそれを収入源とした。十六世紀前半にはオスマン帝国のスレイマン一世の大軍に善戦したが敗れ、ロードス島から撤退した。放浪の末、一五三〇年にマルタ島を神聖ローマ皇帝から領土として与えられ、マルタ騎士団として再起を果たした。スレイマン一世は、再び大艦

隊でマルタ島を襲撃して包囲戦を繰り広げたが敗れた。騎士団の総長は宗教的指導者であり、国家元首でもあるという立場が明確になり、さらに、教皇庁から枢機卿としての待遇を、神聖ローマ皇帝からは大公の称号を与えられた。

その後騎士団は衰退し、一七九八年にナポレオンのマルタ島攻略で、ついにこの島からも追放された。「領土なき国家主権を有する」事が認められ、一八三四年に本部をローマに移した。全世界に広がる病院・医療組織を運営し、国際救助活動を遂行している。騎士団がいなくなったマルタ島は十九世紀前半からイギリスの植民地となり、二〇世紀にマルタ共和国として独立した。

騎士団という名前には中世の貴族社会にタイムスリップするような時代錯誤を感じるが、時代の変化に合わせてつづれそうになっても何度も再起してきたたかな組織だということが分かる。その信念も紆余曲折を経て創立当初の「われらの主、病者と貧者」に戻ったことは力強い。不確定な時代の活躍をみていきたい。

イギリス再訪

松田 昌康

昨年九月中旬から約二週間、私たち夫婦と義妹の三人でイギリスに行った。息子がロンドン中心部から少し離れたサリーキーズ駅近くの団地に引っ越したので、その新居を見ると旅行を兼ねた。宿は棟割長屋式の二階建てで自炊ができ、小さな裏庭があった。息子の住む団地とは徒歩で約一〇分。驚いたことに、夕方には近くの公園に野狐が出没し、栗鼠も姿を見せた。宿の庭にも栗鼠が来て、投げたピーナッツを拾って齧る姿が可愛かった。渡英前に行きたい場所を話し合った。私はオックスフォードとウインザー城を挙げた。オックスフォードは世界的な古い大学の街だし、ウインザー城は、もう四十五年近く前に仕事でイギリスに行った際、休日を利用して駐在員が連れて行ってくれたが、運悪く城の改修中で衛兵に門前払いされ、その時以来の願望だった。

義妹は、期間限定でオープンの博物館収蔵品保管ビル

や、以前に行った移民の多いブリクストンマーケット、コロンビア花市などを挙げていた。当然ながら、美術館や博物館にも行った。ロンドンブリッジの近くにシヤード（破片の意）と呼ばれる尖塔型の超高層ビルが聳え、通称「ウォーキートーキー」（トランシーバの意）のスカイガーデン展望台から南側の眼下にテムズ川、東側にタワーブリッジとロンドン塔、西側にセントポール大聖堂など、晴れ渡った市街ぐるりと見渡すことができた。

オックスフォードには、パディントン駅から鉄道で行った。約一時間半の旅。駅前に黒い牡牛（オックス）の銅像があり、バスもあるが広い道路を約十分歩くと、賑やかな通りに出た。そこは両側に土産物店やホテルの並んだ広い通りに今風の店が多かった。携帯の地図アプリで大学などを捜しながら歩いた。すぐに古い建物の続く通りに出て、中に入れる大学があり綺麗な中庭を拝観できた。市街地としては予想したより小さく、こじんまりした感じ。市街の周りは並木道の先に野原が広がっている。少し歩いて川の所まで行った。川の両側には木立が続いており、川を観光客の漕ぐボートが下って行った。

近くに植物園があり、その前庭が薔薇園になっていて、まだ薔薇の花も咲いていて綺麗だった。その後、現天皇陛下が皇太子の時に留学されたマートンカレッジを拝観した。有料。陛下のお部屋は建物の端の二階で、部屋からは広い野原が見えるところ。中は分からないが、外観は質素な感じ。構内には立派な教会があり、また陛下の植樹された桜もあった。

昼食を取るため手頃なパブを探した。狭い道の角に白壁で窓にハンギングの花が綺麗なパブを見つけた。中の壁には、カレッジを卒業した人たちのネクタイの切れ端？が名前入りで壁一面に飾ってあり、圧巻だった。イギリス定番のフィッシュアンドチップスを注文してシェアした。歩き回った後、屋外にテーブルと椅子をたくさん並べたところがあり、妻と義妹が近くの土産物屋を物色している間、対面のカレッジの中庭を拝観した。

ウィンザー城にも鉄道を使った。パデントン駅から電車で小一時間、終点のウィンザー駅には、お召列車が飾ってあった。観光受付窓口まで数分歩いて列に並び、携帯で事前に予約したチケットを購入して、無事に入る

ことができた。多くの観光客が衛兵交代儀式を見るため既に見やすい場所に詰めていて、見るのは頭越しの感じだった。交代儀式は三十分ほども続き、楽隊が観光客の知っていそうな有名曲を演奏する場面もあった。その後セント・ジョージ礼拝堂内に入った。英国と関係ある国の国旗が並んでいる所には、日の丸もあった。また、エリザベス二世（先の女王）とフィリップ殿下の棺が安置されていて、観光客に分かるように表示があった。

そこを出て、メアリー王妃のドールハウスの列に並んだ。ガラス張りの中に、精巧な家具や人形が配され、玩具というより芸術品の感じ。そこから奥に進むと、剣、槍、盾などの武器を壁一面に飾った部屋や陶器の部屋、絵画の部屋などがあった。さすがに七つの海を制覇した国の城と感じた。建物外の売店でサンドイッチとコーヒーを買ってランチにした。近くに有名なイートン校があるというので、テムズ川の橋を渡って見に行ったが、閉まっていた残念だった。とにかく、四十五年前に果たせなかった願いを叶えることができた。

今回の旅行は天気にも恵まれ、充実した二週間だった。

日本の最後の砦

森田 晃司

昨年米国では、各地の名門大学の構内などにおける銃乱射事件が頻発し多数の犠牲者が出ています。まことに痛ましい出来事ですが、米国では衝撃的な銃撃事件が連日のごとく発生している印象を受けます。

実際、米国内での銃による犠牲者数はコロナ以降に増加が続き、年間で四万人を超える一方で、民間における銃の保有数は三億丁を超えると推定されています。銃による殺傷事件は、日常茶飯事になっているようです。

銃保有を規制する法案が連邦議会に提出されますが、その都度立ち消えになるのが常です。銃を保有しているから事件が発生するのか、事件が発生するから防衛用に銃の保有が必要となるのか、悩ましい選択のようです。思えば、米大陸に住む白人の故郷のユーラシア大陸では、古くから戦乱が続いたようです。民族が入り乱れ、領土を取ったり取られたり、互いに殺戮、蹂躪を繰り返して

きました。日本人には理解できないものの見方、考え方があろうようです。

幸い、日本では治安が良いのが伝統です。一万五千年以上続いたとされる縄文時代の遺跡からは人を殺傷する武器は出土せず、豊かな食材に恵まれて平和裏に暮らしていたとの推定もあります。

近世になって戦国時代という物騒な時代が一段落すると、豊臣秀吉は大名間の争いを禁じた「惣無事令」を出し、農民からは「刀狩」で武器を取り上げました。

この政策は徳川時代にも受け継がれ、幕府は各藩の武器製造を規制し、城の造成も規制、内戦のない二百六十年の治世を実現しました。

江戸時代は、安定した治安を背景に、朱子学を中心に精神文化が高まり、経済発展に伴い武道、茶道、華道、俳句、浮世絵、歌舞伎、落語など様々な分野での文化が開きました。

しかし、戦国時代には伝来の鉄砲製造は技術革新を極

め、大量生産されて世界有数の軍事大国と評された日本でしたが、徳川の平和政策で軍事技術は伸び悩み、幕末には西洋に大きく後れを取る事態となりました。

西洋列強の圧力に屈する形で「開国」と称する西洋化が始まり、日本は、西洋を手本に中央集権、富国強兵に努めて、日露戦争後には「一等国」となった西洋化の優等生でした。

第二次大戦の後には、ヒト・モノ・カネが国境を越えて自由に移動するグローバルイズムという名の西洋化の荒波が一層激しく世界を襲い、日本もその荒波に翻弄され、終身雇用や年功序列などの人事制度や配当政策の変更など、企業経営を初めとして様々な社会の制度や慣行において、日本らしさが次々に失われていきます。

しかも今日では、社会の変革に止まらず、大量の移民が流入する事態となっており、国の形を根本から変えてしまう懸念が広がっています。

日本社会の特色は、治安の良さと共に、秩序正しさにあるのではないのでしょうか。

人倫を基礎とする社会の秩序、家族、友人、周囲の人たちとの絆や思いやり、互いを信頼し助け合う精神こそ日本の宝であり、守るべき最後の砦です。

社会の秩序は一朝一夕に出来上がるものではありません。縄文時代に源をたどることができるともいわれる神道、長い年月の間に日本流に解釈された仏教、儒教（朱子学）が混然一体となり、形成された日本人の心根です。長い、長い平和で安全な暮らしがあって初めて形成される社会の安寧と秩序こそ守るべき日本の最後の砦であり、日本らしさを取り戻す拠点ともなるものです。

自治体、病院、学校などが移民の大量受け入れに係るコストは膨大で、実は、経済的にも逆効果というのが欧米の体験に基づく研究結果です。

長い時間をかけて培われた社会の安寧と秩序を危うくしかねない移民の大量受け入れは、短期的な損得勘定で決すべきものではないようです。グローバルイズムの荒波に対する日本の最後の砦を堅守し、日本の自立への第一歩としたいものです。

アルマーアタに降りたサムライ

吉原 秀東

一九九一年に旧ソ連が崩壊し独立国家共同体（C I S）が誕生した。中でもカザフスタン（以後カザフ）は石油・ガス・鉱産物資源が豊富な国。その国への駐在勤務の社命を受けた。一九九四年一月、身の引き締まる思いでの旅立ちであった。

自分はそれまで二回のモスクワ勤務を経験していた。そのモスクワより更に奥地の僻地とも云えるアルマーアタ（一九九七年までカザフの首都で経済・文化の中心地）への赴任は会社人生でのチャレンジであり、同時に不安でもあった。

アルマーアタには出張で一度来ていた。太陽が眩しく輝く、中央アジアの一つの共和国の都市、というイメージであった。が、まさかその街に自分が、住まいを構えて、日々生活をし、仕事をしに来るとは思わなかった。

到着した一月のアルマーアタはとても寒かった。現地事務所のスタッフに連れられてドステイクホテルへチェックインした。後で知ったのだが、同ホテルは旧ソ連の共産党幹部の優先的宿泊先であった。その外観は空母の様でもあり、内部は照明が少なく、部屋自体も薄暗い。それでなくとも不安で沈みがちな気持ちをも更に重くしたものだ。

着任した翌日は快晴であった。初出勤した事務所の窓から見える冠雪した天山山脈の山々は威風堂々と聳え立っていた。太陽の光が真白な雪に乱反射し景色は眩しく見えた。日中の明るさも手伝い「これがアルマーアタか、よっし、やるぞ！」という前向きな気持ちになった気がした。

着任当時、居住用のアパートは無く、ホテルを住居代わりとしていた。

ホテルでの仮住まいという不安定な生活は二カ月強続いた。改装が済んだアパートに移ったのは着任してから三カ月後だった。それまでの不自由な生活は終わり、台

所や風呂場やリビングといった自由に使える快適な空間を確保し、漸く生活の落ち着きを確保することができた。時も経ち、次第に目も慣れ始め、市内には日本大使館があり、同業の日本人駐在員が居ることも分かった。異郷の地で自分一人ではない、と心強く感じたものだ。

業務関係での来客は多く、日本から、モスクワから、欧州から、と多数の出張者でヒマになることはなかった。これが基本リズムとなり駐在生活も安定期を迎え各種案件、プロジェクトを推進することになって行く。

旧ソ連崩壊後、未開拓だった市場へ戦略的に取り組もうとする会社はカザフ市場に対する注力度を上げた。原油、ガスマグ送用の大径管、リファイナリー施設、通信設備、自動車、農薬、等々カザフのインフラ整備、資源開発、生活レベルの向上、農業振興に焦点を合わせて絞った。こんだ同国向け商品群を組成した。日本政府が供与するファイナンスとリンクさせ、プラント・商品群をカザフ市場に輸出するというビジネスモデルを作り上げようと注力していた。

業務多忙の中、圧巻はナザルバエフ大統領（初代大

統領）から直接電話を貰った時だ。一瞬誰だか分からず、声を聞き、話の内容から本人であると了解した。会話としては、自分が当時仕掛けていたプロジェクトを「サポートするので進める」といった内容だったと思う。権威主義的であったカザフ権力ヒエラルキーのトップからの直々のコンタクトであり、各種プロジェクトにも好影響が、と期待をした。しかし、結果的にはカザフの官僚やら、大統領の取り巻きグループやらに翻弄されるだけで、具体的なビジネス成果には結びつかなかった。

時は過ぎ、一九九七年五月に帰国の辞令を貰った。三年数カ月、思えば短い駐在ではあったが、知らぬ間に時間が過ぎていた。駐在中に大型のプロジェクト案件を成約するとか、「これだ！」といった華々しい業務成果を残すことは叶わなかったが、現地に生活し勤務する初代駐在員として、拠点の整備とビジネス基盤を作り上げた。次の代へ繋げる礎を作った。先ずは駅伝の第一走者の役目を果たしたかと思う。二十八年前の事である。

時折の思い出から

安藤 晃二

もう六十年も前のことであるが、商事会社に入社して数年後に、米国へ転勤を命ぜられた。二月の午後、羽田で見送ってくれた多くの友人、同僚達と家族に別れを告げて、經由地のシアトルへ向かうノース・ウエスト便に乗り込んだ。機上で、しばし呆然としてしていると、機外には夜の闇が近づきはじめ、天候も悪化して、恐ろしいレベルのタービュランスに襲われる。ハッと気が付くと、機体はずみ、そのまま落ちる、どこまでも限りなく落ちて行く。幼児のころ一瞬の楽しみを感じた松坂屋デパートのエレベーターの中の、背筋ゾクゾクの快感なのであったが、今回は生きた心地がなかった。「お前はこんな処で、一体何をやっているんだ」。四か月前に出産を控え、見送りに来た身重の妻の姿が脳裏を過る。「機は雷雲を脱出して、上を飛びます」。機長の落ち着いたアナウンスがあり、安定したクルージングルートに出

た模様で、「恐怖の地獄」が「天国」に変わる。私はその後の人生で、数限らない程の「航空機の揺れの恐怖」に遭遇した。毎日の様に経験したマレー半島上空のスクールの中のフライト、「大丈夫、大丈夫」といわれても、座席のひじ掛けに取り付いても、信頼感などあらばこそあつという間に天井で頭を打ちつける。それでも人々は云う「あなたは、人類が開発した最も安全な交通手段を利用しているのです」と。ともあれ、私の職業生活の重要な部分は、このように、納得感とは程遠い体験から始まったのである。

到着の翌日から、通勤の地下鉄を降りて地上に出ると、摩天楼と呼ばれるニューヨークのビル群のど真ん中に立たされ、男女共等しくその冬の流行、グレー一色のコート姿が飛ぶように通りを闊歩して行く。人々の長身と歩幅の違いに決定的な敗北感を感じる。ミッドタウンの見事な高層ビルの21階のオフィスに初出社、全員の座席が窓から中向きに同方向に座るアメリカ式に驚く時間もらばこそ、部の女性群数名が大はしゃぎで駆け寄って取

り囲む。「ファーストネームは？」日本語では聴き取れないので書けと言う。「読めないわ、でもTではじまるから、Tedで決まりよ」。斯くして、その後何十年かの海外生活でTedと呼ばれる破目になる。但し書きは「ドイツ以外で」となる。ドイツ人達は皆名前を正確に呼んでくれたし、ファーストネームを呼ぶ習慣は同様であった。そんな風土にも拘わらず例外のケースに出会う。私の所属した中堅会社の副社長、強面のK氏（MK）である。誰も彼をファーストネームで呼びたくないのではない、本人が呼ばれたくないのだと、同僚によるこの親切なアドバイスにより、早々とこの会社の市民権を費った気分になりほくそ笑む。その後この同僚とは親しい友人となったことは云うまでもない。

米国中西部のある大企業G社は、私の米国駐在時代の最重要顧客であった。ある日上司と共に表敬訪問に向かった。相手はG社の購買部長、会社の財布を握る人物であり、その重要性を象徴するかの如く、米国の大会社においては清廉潔白の仁がその任に当たるのが常識である。

先ずは日頃のお礼、業界事情など賑やかに、大いに親交を深めた。一瞬話が途切れたとき、先方から、少々唐突とも聞こえるメッセージ、「当社では仕入先から20ドル以上の金品を贈られることを社員に禁じています」。部長は微笑みつつも毅然と言いつつたのである。「ごもつとも」。その時私は、購買担当者の某氏が同席していないことに気付いた。私は、我が社の他の部門の多くの販売担当者がその某氏から耳打ち注文を受け、五番街でギフト調達に奔走している事実には気づいていた。「明日は我が身か」と困惑感を感じつつも、今日の会合には本当に勇気づけられた。



写真 松浦 俊博

福原遷都と鴨長明

池松 孝子

平清盛が福原遷都を強行したのは、治承四年（一一八〇）のことだ。これは政争ばかりでなく動乱の世に相次いだ天災などの影響をも受けたものだ。

二つの大火災、言われるところの太郎焼亡と次郎焼亡だ。太郎焼亡は安元三年の大火で、大極殿を含む八省院全部と朱雀門、応天門などを焼失、死傷者は数千人を超えるものだった。続く次郎焼亡は太郎焼亡の翌年治承二年に起こった。この二つの大火災は京の人心に想像を絶する不安を与えたりう。

平安時代後期は、釈迦入滅後約二千年が経ち、仏教が衰える末法の世に入ると信じられていた。こうした末法思想はさらに強くなっただろう。

こうした中、治承四年六月に平清盛は福原遷都を断行する。源氏の蜂起による反平氏勢力の台頭、伝統的な京

都の寺社勢力から逃れるなどがその大きな理由であった。これらの勢力を嫌がったことだったに疑いはなからう。

源平は宇治川をはさんだ宇治平等院での戦いでは、平家が勝ったものの、この後、源頼朝や木曾義仲が拳兵し、源氏の方が逆に結束を強め勝利を重ねていくと、平氏の威信はどんどん低下していった。また、当初から平家一門には福原遷都に反対していた人々もいたので、清盛もたまらず、わずか半年で福原から退散する形となった。

福原には、清盛の雪見御所があり遷都以前から度々訪れていた。また、宋との貿易港である大輪田の泊（兵庫港）は、平氏にとつての経済的基盤ともいえるところであつた。それにしても突然の遷都では、何もかも準備は不十分なものであつたらう。平安京への逆戻りは無計画な遷都の結末であつたと言ってもよからう。

平安京への帰還後も災難は続き、養和の大飢饉といわれる天災では、養和元年から翌年にかけて日照り、大風、

洪水が起こり、死者は万を超えたといわれる。人災にも見舞われ、餓死した人々は路上に放置されたままだった。被害は深刻で、兵糧米の調達さえできなかった。路上に横たわる死者は四万を優に超え、それらは供養さえされないままだった。

これらの出来事の一部始終を新田の都で見ていたのは鴨長明であった。『発心集』で「此の世の有り様、昨日有りとし人、今日は無し。朝にさかへる家 夕におとろひぬ」と嘆いている。

貴族社会から武士政権に移行するダイナミックな動きの中で長明のみたものを『方丈記』の中でこうも述べている。「それ三界はただ心ひとつなり。心もしやすからずは象馬七珍もよしなく、宮殿楼閣も望みなし。今、さびしき住まひ、一間の庵、みずからこれを愛す」

これが長明のいう人の世の無常だ。冒頭に言う「ゆく河の流れは絶えずして」だ。今も昔も人の営みというのは、なんとはかないものであろうか。それでも人は「象

馬七珍」「宮殿楼閣」を追うのか。人の営みはおろかなものである。



写真 矢澤 正二

散歩、散策、そして三策

市川 忠夫

二〇二五年のある秋の日、近くのいちよう並木を歩いていました。こがね色の葉が、樹々の枝に足元の石畳に、輝いています。しばらく行くと、向こうから子供十数人と大人数人が歩いて来ました。近くの保育園幼稚園の子供たちと先生たちでしょう。さわやかな情景です。

家に帰ってテレビのスイッチを入れると、ニュース番組をやっています。物価高騰や令和の米騒動を報じています。続いては、夏の異常気象です。日本の各地で、高温新記録が出たようです。さらに、日本初の女性総理大臣誕生と内閣支持率の大幅上昇や国会議員数の削減などが取り上げられています。あわただしい画面です。

体の老化を遅らせるために、自身の生活に散歩を取り入れたのは大分前のことです。老化は、体だけでなく、頭にも来ます。歩きながら頭を使うとよいと聞き、テー

マを決めて、考えながら歩くようになったのは、最近のことです。家族からは「転んだり、自転車とぶつかったりするといけないからやめた方がいい」などと反対されましたが、果然と実行に移しました。それまでは『散歩』でしたが、これからは『散策』としました。散歩と散策の違いをしっかりと理解している訳ではありませんが、漢字の雰囲気から散策と思うことにした訳です。

輝くいちよう並木を歩む子供たちの未来を考えながら歩いていると、日本の未来に備えるための大事な策が三つも浮かんで来ました。『三策』です。

第一の策は、「食べ物券制度」です。物価高騰のため、人々は改めて「食べ物」の大切さを痛感しています。異常気象の頻発、肥料・農薬の使い過ぎ、等々が原因で、安全な食べ物が必要確保することが難しくなっています。日本は食糧自給率が低いので、一層難しくなります。いろいろな対策が立てられていますが、頭に浮かんだのは、終戦後、大人がいつも口にしていた言葉です。「もったいない、食べ物無駄にするな、贅沢するな」で

す。口で言うだけでは聞き流されてしまうので、「食べ物券制度」を導入してはどうでしょうか。「お米券」がヒントになりました。量の限られた食べ物に配るには、これが最良だと思います。体格によって、食べ物の量は変わります。国の大好きなマイナンバーカードに身長・体重を登録すれば、適量食べ物券を発行できます。肥満や痩せすぎを防ぐ効果もあるでしょう。先々は制度を、食べ物だけでなく、生活必需品全般に拡大し、物質・エネルギーの無駄のない活用を図りましょう。

第二の策は、「自然との仲良し政策」です。異常気象は、ここ数年を振り返ると、かなり酷い段階になっていきます。日本が異常気象の影響を最も受けやすい国であることに最近気付きました。日本ではさらに、大地震や大噴火も予知されています。防災対策の大幅な強化が必須です。今は「防災の日」は、年一回「九月一日」です。これを毎週、少なくとも毎月一回にし、体も頭も心も、「自然に向き合う＝仲良しになる」ようにするのです。こうすれば、防災力は今より一〇二桁強化されるでしょう。

第三の策は、「三院制への移行」です。日本の停滞三〇年、世界の二〇世紀の大失敗（二度の世界大戦、物質文明の異常発達など）などを繰り返してはいけません。

人間以外の動物は皆、天与の環境で一生懸命生きています。それは心の持ち方が違うためでしょう。政治や経済ばかりにうつつを抜かしていないで、人情についてもじっくり考えることが大切です。ここで言う人情には、思いやり、道徳、倫理、宗教、文化なども含まれます。役割の定かでない日本の二院制を三院制にするのです。第一院は、人情に長期スパン・世界的スコープで取り組む、第二院は、政治に取組む、第三院は経済に取組むのです。議員が「人情・政治・経済」の視点から個人や日本や世界を見ると、これまでとは大分違って見えるでしょう。

これら『三策』を強力に推進すれば、輝くいちよう並木を歩んでいた子供たちは、輝く「二十二世紀」を迎えることができるでしょう。

ライフワーク

稲宮 健一

定年後しばらく教職に就いていた。職場のあった鎌倉を離れて、新潟、つくばなどで過ごした後、定職を離れた。しかし、何か目的を持った課題を探し、自分の時間を勝手に使ってみようと思った。

母親が小さい時、隅田川付近の浜町に住んでいて、関東大地震で被災したとよく聞かされた。地震当日は、町は避難の人々で溢れていて、母は橋から川に投げだされたとのこと。幸い下を通っている船に助けられて無事に避難できた。再び首都圏で地震が起きると、満員電車が脱線して大災害が発生するかもしれない。これを防止する方法を検討してみようと思った。

早速、母校の機械工学科の先生を訪ねた。研究室の院生、学部生が集まり、電車の脱線防止方法のブレイン・ストーミングを行った。とにかく模型を作ってみようと

いうことになり、金属製の1/16の台車モデルを造り、実験室の振動台の上で加振して、台車の振舞いを8ミリビデオで撮影した。しかし、加振時の細かい動画の取得など、期待していた脱線の様子を捉える明確なデータは得られなかった。

その後、シミュレーションに得意な院生が参加し、車輪のフランジを垂直にすれば脱線の安全係数が改善し脱線を抑制することを示した。即ち、車輪のフランジ通過空間にアクチュエータと称する棒を取り付けることにより、脱線を防ぐ効果が期待できることを示した。この結果を鉄道の専門学会「JRA11 2012」で論文発表した。

同学会でJR東海の幹部の方が自慢げに新幹線の脱線防止装置、L型ガイドの開発を発表した。この構造は脱線防止はできないが、事故故に至らぬように車両が線路域から逸脱するのを防ぐ役割を持つ。L型ガイドは線路後、線路域に存在するレール、枕木、踏切板など既存の物体と衝突するが、それに耐える強度を持つと検証されていると私は考えた。そしてL型ガイドの強度をアクチュエータの強度の参考値として使った。

強度については、都立産業技術センターでパラリンピックの三段跳の選手の義足がCFRPで製造され、実用に供していることを知り、実験に基づく実測のデータをアクチュエータの研究に活用した。台車にアクチュエータを取り付け、レール上を台車が通過する場合、レールの側面でフランジが通過する空間があり、この空間に走行の障害となるレール域の構築物は一切ない。障害物はレールのポイント、継ぎ目板、踏切板などである。この空間はアクチュエータが通行できる自由空間であり、提案の主要な要素となる。

脱輪現象のメカニズムは次のとおりである。車両の全長は在来線が20mに対して、車輪一輪当たり、レールと接している長さが進行方向30cm弱、鉛直方向は3cm弱である。そして、脱線はこのレールと接している部分が、地震の振動等で大きな力がフランジ面にかかり、フランジ面が移動して、限界を超えて、レールからの脱輪となる。

自由空間は台車の下部で、フランジの前後に存在する。台車の進行方向に横長の空間である。アクチュエータの

外形寸法としては、幅はフランジの幅より少し狭いが、進行方向の長さは比較的長い辺を確保できる。

昨年十二月十日に沖縄で開かれた日本地震学会で現在の検討結果をまとめて、「直下型地震に対する耐震脱線防止の一提案」と題して発表を行った。

今までの耐震対策は、地震の初期微動（P波）を検出し、直ちに停車させる。しかし多くの場合、本震（S波）以前に止められず、脱線の防止は難しい。また、L型ガイドは脱線を避ける機能はないし、レールの内側に設置された脱線ガードでも、フランジとレールの接触面積は変わらず脱線防止に十分な機能を発揮するのは困難だろう。これに対し、私の提案は、台車にアクチュエータを取り付け、等価的に台車とレールの接触面積を増大させ、両者の接触面の摩擦係数を増大させ、台車がレールとの間で滑る現象を小さくして、脱線を防止する構造である。耐震対策に役立つものと考えている。

（国際特許登録済み）

仏様にお任せします

上田 信隆

昨年、私は年男でした。体調もすこぶるよく、概ね楽しい一年であったと思います。一方で、友人の訃報が何通か届きました。自分だけが調子よく過ごしていても、すべてが万全というわけではないのだと感じさせられました。

これからの余命を心おきなく過ごすにはどうすればいいのか。それは誰にでも課せられた問題だと思っています。そんなある日、私は近くの書店で一冊の本を買いました。本を買う動機にはさまざまありますが、その時は、なんとなく手に取った一冊が私の気持ちに強く響いたように思います。忙しさに追われる昨今の世相や、行き先の見えない若い人たちの動向に不安を覚えていた私にとって、この本を読めば少しは癒やされるのではないか、そんな期待があったのかもしれない。

家に帰ってからゆっくりと本に目を通すと、そこには

当たり前のことが書かれていました。人生訓が中心で、やや説教じみたところもあり、正直なところ面白みに欠ける内容でした。

それでも読み始めた以上は最後まで付き合おうと思い、ページを進めているうちに、「死」、とりわけ「死への対峙」についての考察が、私にとっては大変参考になるものだと感じられてきました。

誰にとっても死はいずれ訪れるものですが、死を過度に恐れたり、逃避したりする必要はない、という考え方は実に心強く感じられました。要するに、人の力ではどうすることもできないことは「仏様にお任せする」ということなのです。たしかに仏様にお任せしてしまえば、なすがままの人生がそこに残るわけですから、気持ちはずいぶん楽になります。

考えてみれば、晩年においては健康の問題、家族の問題など、先行き不透明な課題が山積みです。自分一人ですべて解決できるかと言えば、なかなか簡単にはいかず、人間関係の複雑な絡み合いの中で、誰もが迷うような問題に直面します。特に親しい関係であればあるほど、微妙な

問題が生じることでしよう。

また、金銭に関することは影響の及ぶ範囲が広く、絶対的な解決策が見つかりにくい場合が多いように思います。生き続けることができれば解決の道が見えるかもしれませんが、死んでしまえば本人にはどうすることもできません。要するに、自分だけでは解決できない問題があまりにも多い、ということなのだと思います。

いろいろ考えてみても、人間を超越した問題は、所詮解決できないものだと言っ切るほうがよい、という結論に至りました。

「仏様にお任せする」というのは、一種の開き直りかもしれません。しかし、人は絶対的なものに託すという安心感を持つことが、これからの世を生きていくうえで必要な知恵なのではないでしょうか。

若い頃、現役で企業の中で戦っていた時代には、「死」はとても遠い存在でした。しかし、八十歳を超え、余命を意識するようになると、誰もが真正面から対峙しなければならぬ問題であると実感します。

「仏様にお任せする」という考え方が、私にとっては

気持ちを楽しんでくれました。多くの企業OBの方々にも、何らかの参考になればと思い、今回投稿いたしました。

今回は原稿の締め切りぎりぎりになっての投稿となりました。この時間的な切迫感こそが、このような文章を書くきっかけになったのかもしれない。



写真 松浦 俊博

一人旅したスマホ

内田 満夫

その日の宿泊地・高崎については二十一時過ぎだった。改札を出てビジネスホテルに電話を入れようとして、定位置の左ズボンポケットにスマホの無いことに気づく。懇親会のほろ酔い気分が一気に醒めた。

慌てて公衆電話を探し、交番にも助けを求めて、やっとチェックインしたときには二十三時近くになっていた。部屋に入って、持ち物をあらためてみたがない。今乗ってきた列車のなかで失くしたらしい。こうなると酔いもすっかり醒めて、旅気分はすっ飛んだ。

スマホが我が占有を離脱して、一人旅に出ってしまったのである。翌日はまず、スマホ探しから行動開始しなければならぬだろう。三泊四日ツアーの楽しみの目論見が、ガラガラと崩れていく。万一反ってこなかった場合の不便、面倒などを考えだすと、不安が際限なく膨らんで眠れない。もちろん公衆電話から何度も、自機の番号

を発信はしてはみたのだが、呼び出し音が空しく鳴るだけだ。もちろん誰も出ない。

翌朝一番に、高崎駅の落とし物センターに駆け込む。

高崎は上越・新潟方面と北陸・敦賀方面との分岐点である。新潟到着の列車から一点、北陸方面に向かった列車から一点、スマホが拾得されていることはすぐに判明した。しかし、どちら方面行きの列車で到着したのか、自分でもよく覚えていないのだ。

センターの職員を通じて現物の特徴を照会するもの、決め手に欠け自機に該当するかどうかはハッキリしない。GPS探索をかける手があるのだが、あいにく高崎駅近辺にはドコモの店舗がないらしい。

少し冷静になって、前日の行動をあらためて反芻してみる。企業OBベンクラブの懇親会で失くした可能性もないことはないのです、その日の予定を取りやめて代々のオリンピックセンターに舞い戻る。前日の会場のカフェに戻りスタッフに確認し、念のためオリセンの事務所にも紛失の届を出した。

そこまでで十五時近くになっていたが、元の旅程に戻ることにして、その日宿泊予定の上田をめざす。上田の駅近にはドコモショップがあるとの話を、高崎のセンター職員から聴いている。明日の朝一に、スマホが新潟にあるか金沢にあるかがGPSで確認できさえすれば、手を打てるし旅も続けることができる。

真田氏の城下町・上田には初めて降りる。駅前のおこりに私好みの呑み処の目立つ、居心地よさそうな雰囲気だ。その一つにしげ込んで杯を傾けるが、心は晴れない。スマホが手元に戻らなかつたら厄介なことになる、どうすれば？ そんなことが堂々めぐりして、酒がちっとも旨くないし、酔いも回らない。

翌朝、開店直後のドコモショップに飛び込んで、自機の所在探索を依頼する。ものの十分ほどで結果が判明したのだが、その結果は思いもよらないものだった。なんと自機の現在地は、神奈川県川崎市の登戸だというのだ。そんなはずはない、とんだ方向違いだ！

キツネにつままれたような気分で、しばらく呆けたよ

うになっていたが、そのうち興奮も鎮まってきた。「登戸」なる地名でピンと来るものがあった、それが徐々に形をなしてくる。登戸は小田急とJR南武線とが交差する交通の要衝。約四十年前の在京勤務時代、よく乗り降りしたので土地勘があった。

懇親会が終わって、小田急の参宮橋駅から終点の新宿までたったの二駅。まさかその車内で失くすとは、まったく思い至らなかった。代々木からオリセンまで、いつもは徒歩で行き帰りしていたのだが、その日に限ってなぜか、初めて小田急を利用していった。魔がさしたとしか言いようがない。

そうなれば迷いはない。ツアーをただちに中止して、小田急の落とし物センターがあると思しき登戸にまっしぐらだ。私の、年に一度の楽しみの合評会便乗ツアーだったが、今回はとんだ結果になった。あとは敗残兵のように、新幹線で神戸にただ帰るだけの何の変哲もない乗り鉄になってしまった。あいにくの曇り空で、芙蓉も望めない追い打ちも食らって……。

数字合わせ

荒岡 衛

2025年は和暦では令和7年である。よって昨年の七夕は和暦で書くと7が3つ重なる。平成9年（1997年）には9が3つ重なった9月9日にJRで銀河鉄道999にちなんだイベントが開催された記憶がある。その頃は紙の乗車券が主流でそれには9・9・9と印字されていた。しかしSUICA等交通系電子マネーが主流になった令和では、乗車券の発行そのものも少なくなっただうえに印字も西暦の2025になっていて、2年後に999が再登場するかは疑問である。

さて飛行機ではボーイング社の旅客機の機種番号が700番台なので、それに合わせて乗ってやろうと思いついたのは2月中旬だった。どういふことかというのと前述の令和7年7月7日ならボーイング（以下Bと略す）777に乗るといふことである。1月7日、2月7日は過ぎてしまっていたし、B717もB727も日本では飛

んでいない。日程として間に合うのは3月7日のB737以降だ。B747とB757はその時点で国内線に就航していないから諦めざるを得ないがB767、B777、B787は国内線で乗れる。というわけでこの4機種に搭乗する計画を立てた。振り返ってみると平成7年（1995年）は仕事が忙しい時期で、子育てもあり遊びのために飛行機に乗れる状態ではなかった。またB747は国内で飛んでいたけれど、B777は日本ではまだ使用されておらず、B787はまだ生産されていなかった。

手始めは3月7日のB737である。折角乗るのだからまだ乗っていない機体に乗りたい。日本航空の方は既に全機搭乗済であるのに対し、全日空の方はまだ未塔乗機が残っているのでこちらの就航路線を探す。一日二往復以上して別機の機体が入ること、搭乗日まで時間が短いけれど空席があることなどを考慮して東京―岩国線（NH635／NH640）を選択した。コストを抑え、かつ希望の席を確保するため予約と座席指定までは直ぐにしたものの、購入したのは当日のシニア割だ。岩国ま

でせっかく行ったのだから錦帯橋を渡り岩国域に上った。運よく両便とも初乗り機だった。

次に6月7日のB767は東京―鹿児島線（JL643/NH630）を選択した。鹿児島空港におけるダイヤ上の待ち時間を9時間30分と長くとつたのは、この間に本土最南端地点である佐多岬へ行こうとしたためだ。

搭乗日まで十分余裕があったので変更不可の早割航空券を買った。梅雨時だから天候が悪ければ空港内で待機するしかないと覚悟をしていたが、運よく晴れてくれた。

公共交通機関はないのでレンタカーを使い、往復約270 km走り最南端に到達し証明書もいただいた。

7月7日はB777の路線を探す。日本航空の国内線機材は既に全機退役し国際線機材しか残っていない。時折国内線に就航することもあるけれど、基本的には国際線に入っている。それで往復とも全日空の東京―札幌線（NH57/NH76）を選んだ。札幌―稚内を加えて本土最北端に挑戦することも可能だったけれど、別の機種なので札幌市内へ行き、まだ乗ったことがなかった藻岩山のロープウェイとミニケーブルに乗った。ミニケーブル

というのは通常のケーブルカーなら2輛が釣瓶状態で下するが、距離が短いので1輛が上下する。

最後の8月7日にB787が飛ぶ路線は多い。この時は京都に墓参りに行こうと行先は大阪を選んだ。大阪万博が開催されていて混雑が予想されたので早めに安い券を購入し座席も押えた。ところが当日関西地方の天候が良くなかったこと、少し前に寝違えて首筋が痛かったことより京都へは行かず、大阪中之島美術館で「日本美術の歛脈展」を見て帰った。行きの全日空のNH15便について前日に機材変更のメールが入りヒヤッとした。内容をみたら機種がB787-8からB787-10に変更されただけだったので胸をなでおろした。帰りは日本航空のJL126便を選択した。

このようにして計8回の数字合わせフライトを達成した。チェックイン時の係員や搭乗機の客室乗務員にこの数字合わせて搭乗していることを話したものの、認識していた人は一人もおらず、共感してくれたのは8月7日の日本航空の客室乗務員一人だけだった。

クビライ時代のグローバル化

松浦 純子

最盛期のモンゴル帝国の面積は三千三百万km²で、ほぼアフリカ大陸の広さに匹敵する。これらの地域の征服は全て十三世紀に行なわれ、チンギスハーン、息子、孫の三代で地球上の陸地の二割に及ぶ広い地域を占領した。

帝国はチンギスハーンの孫クビライの時代に最大の領域を形成し、経済もグローバル化した。アジアとヨーロッパにまたがる領土を築くのに軍事力が弱くては話にならない。モンゴル人は騎馬遊牧民で、子供の時から馬の扱いには慣れている。統治者は千戸制や厳正な軍紀で軍隊を率いた。また、モンゴルの馬は小柄だが長距離を走ることができ、騎士は武器として「てつはう」、弓、弩等を操り、鎧は鉄製ではなく革製で、身軽に行動できた。つまり戦闘力や機動力を備えていたのである。さらに情報収集力にも優れ、ムスリム商人を利用して得た情報に

基づき征服を進めた。

もちろん征服事業はいつも成功したわけではない。日本、ベトナム、ジャワ遠征には失敗している。しかし、クビライは海上遠征の失敗から陸上輸送より水運での輸送の方が効率がいいことを学び、国内の食糧輸送は主として海運や河川、運河を用いて船舶で行うことを決めた。

クビライは戦闘だけではなく、経済政策にも能力を持っていた。一族の抗争が終息し、パクスハタリカという繁栄の時代が訪れると、モンゴル帝国は大元ウルス(元朝)、チャガタイウルス、ジョチウルス、フレグウルスという元朝を盟主とする緩やかな連合国家に再編された。カアン(皇帝)の称号はチンギスの血を引く元朝の統治者だけに与えられる特別な称号であったが、各国のモンゴル人の王侯や高官には帝国各地から得られる「クビ」と呼ばれる富の配分を受ける権利があり、カアンは彼らから不満が出ないように対策を講じていた。この「クビ」の額は財政のかなりの割合を占め、結局、富が産業の発展に投資されることはなかった。

帝国の財政運営は通商と専売、税収の商業利益でほとんどが賄われていた。

当初ムスリム商人、ウイグル商人という二つの国際商業組織がモンゴル人に資金や物資の調達をしていたが、商業や貿易が活発になると「オルトク」と呼ばれる企業・会社の組織に発展していった。これはムスリム商人、ウイグル商人、ヨーロッパ出身の商人などからなり、彼らは出資者を募り、利益は出資額に応じて分配された。株式会社の原型である。出資者にはモンゴルの王侯貴族もあり、商人は世界各地で香辛料、陶器、高級織物を販売した。従って扱う金額も高額になり、銅銭だけでは足りず交鈔という紙幣を発行した。交鈔は銀と兌換でき、納税は必ず交鈔を用いて行なわれた。

また、政府は「オルトク」の商人を使って財務の立案や国営工場の経営にも関わらせるようになった。まさに商人を動かして帝国の経済を富ませたのである。

一方、専売では「塩引」という塩の引換券を発行し、有価証券として取引され、事実上の高額紙幣の役目をは

たしていた。さらに商取引から徴収する「商税」もあり、クビライは関所を通るごとに払う通過税を撤廃し、最終売却地で売却代金の3%を商税として一回だけ払えばいいシステムにした。これにより遠距離貿易が活性化し、商税収入も増大した。

南宋を滅ぼした後はその海路を利用して海外との交易も積極的に行った。運河と海上輸送路を用いれば首都の大都は「オアシスの道」・「草原の道」と「海の道」を繋ぐ結節点になる。さらに、国内に張り巡らされた交通路にはジャムチと呼ばれる駅伝制が敷かれ、商人や旅行者が安全に通行できるようにパスポートに相当する牌子を発行した。

数多くの点で進んだ政策を実現させたクビライであったが、彼が発展させた海陸の交易ルートは死後半世紀経つと疫病のルートにもなり、元の滅亡や人口の激減を生むことになった。グローバル化とその弊害は数年前のコロナの拡大を連想させる出来事だった。

反権力の人 大越浩平さんを偲んで

矢澤 正二

大越さんとの出会いは大学のゼミであった。毎夏追分
で合宿をした。集まりは卒業後も家族を含め交流はずつ
と続いた。そこでいつも特異な議論で皆を煙に巻いてい

たのが大越さんであった。その原点にあるものは高校時
代の安保闘争の鮮烈な体験であろうか。その中で常に一
貫していたのは再び戦争をしない社会ということだ。彼
は反権力、反戦、反骨の人だった。そして愛妻、家族愛、
友人思い、部下思いの人でもあった。

彼のライフワークというべきは縄文思想の研究である
う。争いを好まない縄文人の生き方に深く共鳴するもの
があったと思う。また大のジャズ好きであった。その造
詣は深く、聞く者を引き付けた。そして食通でもあった。
フォト句の面々と東北旅行へ行った際に、その土地の山
海の珍味を彼の解説と共に食したことは、今も語り草と
なっている。

彼は日本通信工業の役員として辣腕を振るったが、途
中癌が見つかり胃の全摘出という大手術をして約半年間
の入院となった。このとき彼はもう仕事は無理と思つた
ようだが、皆が温かく迎えてくれ復帰できた。これは日
頃厳しくとも愛情をもつて人にあたっていたからだろう。
そしてその和を次へと繋いだのも彼だった。今となって
は、その大切さを痛感する。

「写真もある俳句ならお前にも出来るだろ。リハビリだ」
と誘われたのがOBペンクラブだった。軽い気持ちで入会
した。それは私が脳卒中後三か月しての白馬の別荘だった。
高原の清涼な空気が私の身体の隅々まで行きわたり、
心身ともに回復するのが分かった。ずっと見守ってくれ
た、私の命の恩人です。

二〇二五年三月大越さんは天国へ旅立った。誠に残念
である。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

争わず領土海域広げたり
さくら咲くあまりに急な別れかな
浩平
正二

短 編



写真 長尾 進一郎

昭和二十年八月九日、長崎にて

池田 隆

昭和二十年八月九日は真夏の太陽が容赦なく照りつける暑い日でした。朝早くから空襲警報が鳴り渡り、緊張した空気が長崎の街一帯にみなぎっていました。原子爆弾が落とされたのはその日の午前十一時二分です。

世間はすでに負け気分でした。いつ大きな空襲があるかも分かりません。多くの家では伝手を頼って田舎に疎開していましたが、私達は田舎に知合いもなく、市内に留まっていました。勤め先の三菱造船所の鮑の浦や立神の工場が二回の空襲を受け、勤労課長の私は後始末のため会社に泊まり込んでおりました。

妻の百合子が妊娠中で八月のはじめが出産予定日でした。だが家族の面倒もみられず疎開もできません。諫早の近在出の家政婦が申すには、「奥様がこのように、芋や南瓜ばかりでは、安産は覚束ないでしょう。幸い私の田舎にはまだ多少のお米も野菜もありますから買出しに

来ませんか」とのことです。

被爆三日前の八月六日、長崎中学の二年生だった長男の昭がその家政婦と一緒に大きな空のリュックサックをさげて、諫早の小野村に出発しました。その日のうちに帰宅すると思いましたが、翌七日になっても帰ってきません。小野村付近には海軍の工場があり、空襲のとはちりでも受けたのではないかと不安が募ります。

八日には最終列車が着くまで長崎駅で待っていました。が、とうとうその日も帰ってきません。当日小野飛行場に爆撃があったと耳にし、不安が高まります。

八月九日の朝早く会社へ出勤して、諫早方面から汽車通勤してくる人に昨夜の諫早方面の被害状況を聞きましたが、大した被害はない模様です。とりあえず安心したものの自分の目で確かめねば、不安は解消しません。

鮑の浦の事務所で、先の空襲による犠牲者の慰霊祭の計画をしていましたが、早く諫早へ行って現地の状況を知りたいと内心思っていました。しかし空襲警報が発令され外出はできません。

ところが九時過ぎに空襲警報が解除され、警戒警報に替わりました。この警戒警報の間に長男を探しに行こうと決心したのです。

会社のことは課員に託し、午前十時半、長崎駅発の汽車に乗ろうと駅に行きました。しかし構内放送があり、その列車は都合で約一時間遅発すること。一時間の待ち時間を無為に過ごすのも惜しいので、浦上の兵器製作所へ慰霊祭の打ち合わせに行こうかと考えました。

ただ外は灼熱の暑さで、駅構内の待合室は階段口から吹き込む涼しい風でまことに快適でした。それで浦上まで行くのをやめて待合室のベンチに腰を据えて涼みながら一時間を過ごすことにします。

ところが意外に早く、十一時前に上り列車が発車する旨の構内放送が流れました。鉄帽を肩にして乗り込むと、直ぐに列車が動き出します。浦上の機械工場、三菱製鉄所を左に、大橋の兵器製作所を右に見て道ノ尾の方に向かいます。これらの工場が無事無傷で残っているのが誠にうらやましくなりません。

汽車は道ノ尾駅を出て、長与町に向います。浦上の奥から長与へ山越えで抜ける道があります。以前にも一、二度通ったことがありましたが、その道は長与駅手前の山裾で線路を横切ります。

そこへ汽車が差しかかった瞬間、ガス溶接の火花のような紫の閃光が火柱とともに立ちました。大轟音が起ります。汽車の窓ガラスが飛散し、車体はガタガタと大揺れ。

間髪を入れず鉄帽をかぶって、座席の下に潜り込みました。列車は少し進んで、駅構内に停止します。「皆さん、空襲警報ですから裏山に避難してください」と駅員の誘導で駅の裏山に乗客一同避難しました。

会社はどうか、家族はどうか、一方諫早の長男はどうか。長崎へとんで帰るには山越えで数時間かかるだろう。汽車が動かないと諫早にも行けない。いかにすべきか、焦らずに腰をすえて深く考え込みました。

二十分ほど経って、満身創痍の列車は諫早に向けて出発するという知らせがあります。自分は長男を探しに来

たのだ。まずこの目的をとげてから長崎へ汽車で帰ろうと決心し、列車に再び乗り込んだのです。

徐行を続ける列車は諫早駅に入りました。瞬間、異様な状況を目にします。駅のホームには、戸板がずらりと並び、駅員や防護団員が右往左往しています。何かと聞きましたら、次に大勢の負傷者を乗せた列車が入ることです。長崎の被爆状況は分かりませんが、何分にも容易ならぬものがあると想像しました。

諫早の街なかは静かでした。額の汗をぬぐいながら、街を通りぬけて島原街道を愛野方面へ向います。一里半ほど歩いて、小野村につきました。家政婦の家を見つけ、家に入ると広い土間になっていて、右側は座敷、左側には農具などが置かれ、その奥は炊事場になっていました。人気はなく、大声で呼ぶと奥から声がありました。長男はその日の朝、諫早から長崎へ帰ったとのこと。せっかくなか訪ねてきたのに、愕然となりました。

外に出て長崎の方向を眺めると、澄んだ青空の地上数千米ートルのところは一線を画し、その下は真っ黒です。

あの真っ黒のなかで家族四人はどうしているだろうか。これが一生の別れで自分ひとりがり残されて孤独になるのかと、しばし呆然となりました。

とにかく一旦長崎に引き返そうと今来た道を再び諫早駅に向かいました。駅ではいつ長崎行きの汽車が出るか見当もつかないとのこと。やむをえず約八里の道を歩いて帰るほかに方法がありません。汗をふきながら、すたこらと長崎市内に向かって歩き出しました。

喜々津の手前に国道と汽車の線路が平行している箇所があります。そこまで来たとき、長崎からの上り列車があふれるほど人を乗せて止まっていました。汽車のデッキから「池田さん」と呼ぶ人がいます。よく見ると、実験場の若杉技師です。この人は後に長崎造船所の労働組合の組合長になり、組合長をやめた後に原爆症状のため亡くなされたのですが、当時兵器製作所へ軍関連の研究のために造船所から派遣されていました。

何か言っています。「池田さん、この列車には造機設計の岩崎技師や誰々が乗っている、帰ったら関係先へ伝えてください」と確かに聞き取れました。汽車は動き出

しました。手を振りながら別れて私は長崎へと足をすずめます。

喜々津を過ぎてしばらく行くと、向こうから数人の塊がきます。一見して長崎で被爆して自分の家へ歩いて帰る人たちとわかりました。「長崎の状況はどうですか」と問うと、「いや、私たちは長崎の駅前で爆弾にあったのですが、長崎は街全体がもう火の海ですよ」というのです。

またしばらくして別の一団に会ったので、私は同じ質問を繰り返しました。それに対して「駅から浦上にかけては全滅ですが、長崎の旧市街はまだ壊れてはいませんがただ長崎県庁から出火して、筑後町から勝山町のほうへ火災が延焼しています」との返答です。

またしばらく歩いて次の一群に会いました。「新大工町は燃えていますか」と私の質問に対して「新大工町まではまだ火はきていません」との返事です。被害の程度はわかりませんが、自宅は壊れていても、焼けてはいないことがはっきり分かりました。早く帰ってやらねば

と気が急ぎます。

古賀の町を通り、矢上の町に着いた時にはもう暗くなっていました。すでに夜八時を過ぎていたのでしょうか。

日見峠を越え下り坂を一気に走り下りて、螢茶屋の市電の終点に着き、長崎の街に入りました。

電車道は諏訪神社の下まで見通しがつきますが、人の気配は全くありません。明かりは消え両側の街路樹が無惨に倒れています。死の街かと思われるような状況です。電車道に面した我が家にたどり着いたのですが、コンクリート塀の木製の非常扉はふっ飛んでいます。

そこから家の庭に飛び込み、「おーい」と声をかけると、「はーい」と百合子の大きな返事が返ってきました。「昭はどうした」と聞き返しますと、「ここにいます」という返事。長女美美子も次男隆も元気で。一生を通じ、この時ほど感激し、嬉し涙にむせんだことはありません。まだ空中を敵の飛行機が爆音を轟かせて飛び回っています。暗くて家の中の状況は分かりませんが、早く避難しないと再び爆撃を食らったり、火が回ってきては危険

です。緊急時用に契約しておいた矢上の東望海水浴場の貸間へ行こうと、バケツに日用品を入れて一家五人は直ぐに日見峠へ向かいました。

昭はその日の朝早く小野村を出て、十時頃の長崎行き
の汽車に乗って帰ってきたとのこと。長崎駅へは十一時
前に着いたようです。皮肉にも私とは長崎駅ですれ違っ
ていたのです。当時の長崎駅は下り列車のホームと上り
列車用の改札口が相当離れていました。

彼は諫早で買い込んだ食料を大きなリュックサックに
いっぱい詰め込んでいましたが、あまりに重く長崎駅前
の一時預かり所に一旦預け、新大工町の自宅へ向います。
その途中、諏訪神社の前で原爆に遭ったとのこと。す
飛び散る屋根瓦で少々かすり傷を受けたが、大したこと
もなく自宅へ走りこんだそうです。

百合子と芙美子は当時、家の中にいたのですが、原爆
が炸裂して爆風を受けた時はたまたま二人とも壁に囲ま
れた廊下の隅にいたので、被害を受けませんでした。庭
に面したガラス戸のガラスが飛散して小銃玉のように柱
といわず、壁ふすままで突き刺さっていましたので、居

場所が幸いしたのです。

隆は向かいの家で遊んでいたのですが、爆心地方向と
は反対側の窓際にいたので、爆風の直撃を避けられまし
た。いつものように屋根の上で遊んでいたならば、爆風
に吹き飛ばされて庭に叩きつけられていたでしょう。誠
に慄然とします。

三男の宏は百合子の胎内にいましたのでもちろん無事
でした。だが、もしも予定通り八月はじめに生まれてい
たならば、庭に面した座敷で寝かされていたはず。す
そうしたら布団ごと一緒に爆風で吹き飛ばされて庭の池
にでも放り込まれていたでしょう。皆々一応無事、無傷
であつたことが何よりも幸いでした。

さて、日見峠に向かった家族五人は、螢茶屋を経て坂
道を登って行きました。一時死の街と思われた通りも人
通りがあり、いずれも矢上の方に避難する人たちです。
日見峠への中途に梶原茶屋というところがあります。

その辺りに差し掛かった時には夜も更け、私は会社の方
が心配になります。家族の方は一応目処がつき、東望

まで逃げれば一応安全圏に入ると思いました。しかし矢上まで直行するには、一同疲労しています。道端の草むらで野宿をして夜が明けたら矢上へ行くように指示をして、私は元来た道を市内に引き返しました。

新大工町から諏訪神社の前を通り、勝山小学校から上筑後町を抜けて駅前へ出ました。途中、上筑後町までは焼けていませんでしたが、上筑後町を通り過ぎた辺りからはすでに人家は焼け落ちて、道はまだ熱い瓦でぬくもっており、余塵が赤く燻っていました。

県庁から出た火は古川町の台地をなめ尽くした後、鎮火しておりました。駅前には馬の大きな焼死体も横たわっており、ガス会社に堆積してあったコークスの山が青く不気味な色をあげて燃えています。稲佐橋まで来ましたが、橋が燃えています。炎の間を通り抜けて対岸の稲佐に渡りました。

敵の飛行機が頭上に来ます。たぶん爆撃後の実状偵察でしょう。頭上を通過する間は道端の防空壕に入って退避します。退避を数度繰り返し、鮑の浦事務所地下防空壕にある防弾本部にたどり着いた時は、もう夜の十二

時頃でした。

勤労課の連中は私が朝出たまま帰ってこないのを、心配して捜査隊を出そうかと協議していました。朝から飲まず食わずの長い私の八月九日はかくして終わります。

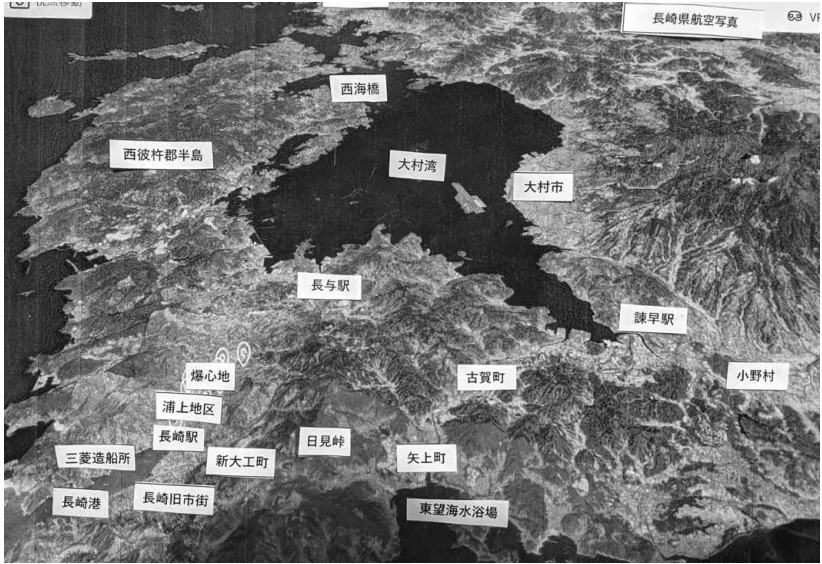
十日以降は会社に泊まり込み、原爆で怪我をした人たちの世話や亡くなった方々の後始末に追われました。会社の裏の焼け跡に材木を積み上げ、数多くの従業員家族を我々の手で茶毘に付した次第です。

(注記)

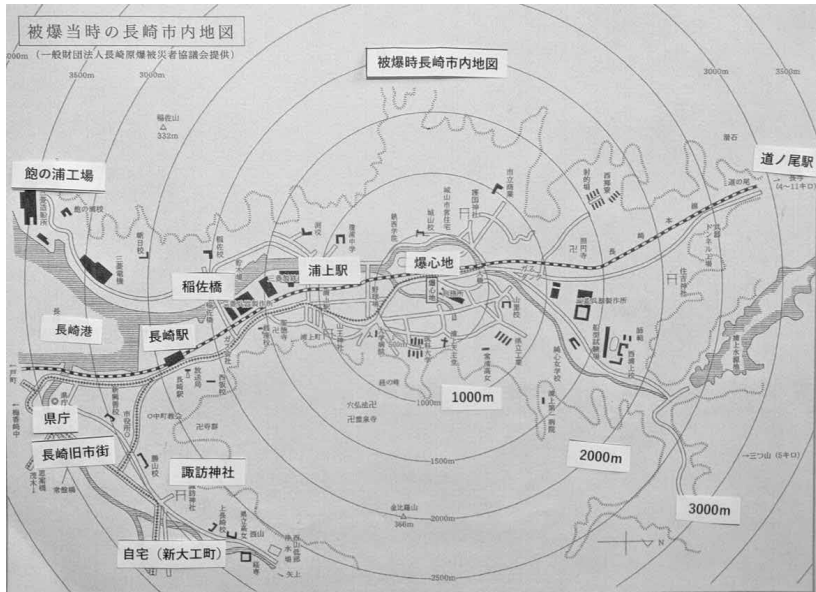
池田平治は生前(昭和四十五年)に自身の被爆体験をテープレコーダーに向って証言していました。半世紀後にそのテープを聴いた曾孫の森原彩子と瞭の姉弟が感動し、文字起こしを行い、次男の筆者がそれを校正しました。本文はその文章を一般向けに書き改めたドキュメンタリーです。ただ父も目撃した被爆地の惨状については心が痛み全てを語り切れなかったようでした。

なお筆者自身の原爆体験記憶は『悠遊』三十号で『ピカドン』と題して認めました。

長崎県航空写真



被爆時長崎市内地図



活 動 報 告



写真 松浦 俊博

何でも書こう会

私たちは会社や役所をリタイアすると大幅に時間の余裕ができて、現役時代には思いが及ばなかったことを考えてみたり、読書や旅行、その他さまざまな趣味に没頭したり、多様な世界に入り込むことが可能になります。

そのこと自体もたいへん楽しいことですが、それらをまとめて文章にしてみる、というのがさらに面白い作業なのです。

「何でも書こう会」はそのような発想から生まれた企業OBたちの集まりで、テーマは文字通り森羅万象。

最近の国際情勢や政治経済、科学技術など硬派のものから、歴史、文化、絵画、音楽、さらには宗教、法話、紀行文、食談、雅文、戯文、日々の身のまわりのことといったるまで、じつに様々です。

何を書いても自由、唯一のルールは八〇〇字プラスマインス一〇字ということで、月一回、寄せられた作品（エッセイ）をかわるがわる発表し、それに対して皆で喧々

囂々、楽しい半日を過ごすのです（終わったあとのアフターファイブもお楽しみ）。

それぞれの作品については内容もさることながら、自分の考えや気持ち、あるいはその場の雰囲気などを、いかに確に相手に伝えられるか（ひとりよがりになっていないか）などを考えていかなければなりません。

また同じことを述べるにしても言葉の使い方を工夫して、楽しい表現で、ときには遊び心をもって、個性豊かでウィットに富んだ作品に仕上げられるよう、皆で切磋琢磨していききたいと思っております。

新規メンバーの新鮮なセンスを期待しておりますので、今年もお知り合い、お友達、ご親族などをお誘いいただいて、一人でも多くの方と文章を書く愉しみを共有していきたいと思えます。

どうぞよろしく願いたします。

（プロマネ 大森・志村・吉田）

サロン21

政権に返り咲いたトランプ米大統領の一挙手一投足に世界の注目が集まり続けた一年でした。リベラルが仕掛けていた文化革命に対する逆襲の政策を次々打ち出し、また、米国の巨大市場を武器とした高関税政策で世界の耳目を集めました。ただ、ウクライナ終戦ははかどらず、イスラエルのガザ侵攻も制御が難しいようで、世界の混乱は続いています。

日本国内では、日本売りの政策が続いた自民党政権は崩壊の危機にありましたが、女性総理の登場で支持率が回復しています。果たして、高市新政権は期待にこたえられるでしょうか。

サロン21では、五百年続いた白人による世界支配は崩れるとの見方も出始めている混沌とした世界情勢の中で、日本の国益、国民の安寧を守り抜く政治勢力の台頭を待ちつつ、我々草莽に何ができるのか、研鑽を重ねてまいります。

令和七年の各月のテーマとプレゼンターは左記の通りでした。

一月	トランプ就任演説と日本の対応	森田晃司
二月	トランプの常識への革命	森田晃司
三月	二十二世紀の資本主義	児玉寛嗣
四月	トランプ関税を考える	森田晃司
五月	コメ消滅	森田晃司
六月	国内外の情勢に対する対応	下山健夫
七月	二十二世紀の資本主義（回顧）	下山健夫
八月	夏休み	
九月	新政権に何を望むのか	森田晃司
十月	休み	
十一月	高市新政権への期待	森田晃司
十二月	日中冷戦への対応	森田晃司

（プロマネ 下山・森田）

ペン俳句のこの一年

佳句鑑賞

西川 知世

ペン俳句は二〇二五年、主要な会場を地域交流センター代々木において休むことなく句会を続け、活発に相互の選・選評が練り広げられた。プロマネの安藤さん、会計担当の宮原さんに感謝する。宮原さんはいつも、休憩のおやつを用意してくれている。ペン俳句ではもう当たり前のようになっているが、私の関わっている他の句会ではありえないこと…嬉しい。彼女のバッグが開いて、かさかさと言がすると、句会開始の緊張が解けて和やかな空気のなか句会となる。カーリングの試合の選手のもぐもぐタイムに似ている。

今年度の吟行は十一月の新宿御苑。天候に恵まれ、菊花展が開かれていた。メンバーは半日を三々五々俳句手帖とペンを手に歩いて作句する。同じ時刻、同じ場所を歩いて作った各人の俳句は実にバラバラ…これが吟行の醍醐味である。閉園後、安藤さんの手配を得て老舗の中華料理店に腰を下ろし、丸テーブルの句会となった。大いに盛り上がったことを報告させていただく。

輪飾の小さきを祝ふめでたさよ

西川 知世

雑踏を来て吊るす背広に冷え残り

鮫鱈鍋の湯気や話のまた途切れ

七夕の笹に人待つ逢瀬めき

水音の屋上庭園秋暑し

太宰忌の町の灯小さしカフェの椅子

横抱きにミッキーマウス東風の街

.....

山茶花のとめどなく散り今朝の風

宮原 風

轟るや心音探る聴診器

春雷や黄泉平坂あの辺り

晩年のひと日くを余花の雨

夜半の湯や胸の奥処へちちる啼く

二句目、轟るやの句、轟るは「つちふる」と読み季語。

黄砂のことで大陸から春にやってくる。診察室の窓から

見る黄砂が不安に繋がる。晩年の句、余花は夏になって
なお咲く桜の花。色も白っぽい。日頃の境地と重なるの
か、中七が作者の人となりを表わして秀逸。

寒鯉の身じろぎもせず泡ひとつ

松田 一文字

朱鷺色の空にゆふ星^{つづ}春ちかし

汽車往きてまた虫すだく闇の原

野狐の尾を垂れてゆく曠野かな

汽車往ける平野に藁塚^{わらづか}の数多かな

一句目、寒中の鯉は水底に動かない。吐く泡が生きて
いる証である。寒鯉も動かないが、作者も息を凝らして
泡が上がって来るのをじっと見ている。二句目、夕焼で
あろう、朱鷺の羽の色を思う淡い紅色の夕空である。詩
的感覚全開。宵の明星であらう星が知らせる春。

鋭角に薄氷割れて沈みけり

浜口 須美子

雛納め男雛女雛を向き合はせ

電線に鳩同じ向き秋近し

子と競ふ手花火の玉落ちるまで

せみせみせみ五臓六腑に蟬の声

二句目、雛の顔に薄紙を巻いて、そうつと木箱に入れ
ていたことを思い出す。毎年、お雛様には一年という重
さが増えている。下五は家族への祈りが現れているよう
に思った。五句目、平仮名でたみかけて、蟬の容
量を類推させる。愉快で同感できる手法と出会った。

剥落の築地を洗ふ青時雨

新田 ゆふき

マウンドの背ナに落日甲子園

竜胆の孤高の色や尾瀬暮るる

小春日やポケモンサンダル裏返し

木曾路来て山はここまで吊し柿

一句目、築地は大型の土塀、「ついち」。青時雨が季語、夏の雨のこと。江戸前の粋な句である。三句目、竜胆の青に孤高を見る。尾瀬沼の日暮れ時、竜胆の青が静かに溶けて行くよう。五句目、木曾街道の山径を抜けて、静かな山間の村落に入る。吊し柿の色が句の中に鮮明。

水門の陰に花びら船溜り

中村 晃也

椎若葉もがりの列の木遣り唄

噴煙は雲に届かず蟬の殻

ロト籤をコインで削る十二月

舟繋ぐ鉄鎖の軋み冬隣

一句目、五句目、東京は水門が多い。そして、桜も。

いかにも江戸っ子を思わせる小気味よい俳句である。

三句目、遠くに噴煙をあげる山、手の届きそうな木に

は何かを指しているようにしがみつく蟬の抜殻。空も

山も蟬の抜殻人も関与しない噴煙。視点が面白い。

小春日や行く宛もなく街ぶらり
長尾 進一郎

雷の落ちし気配や隣町

電柱の揺らぎて見へる炎暑かな

六月の田んぼに映る空の青

夏近し庭木刈る音リズムカル

一句目、手には愛用のカメラがありそう。自然体の時にシャッターチャンスがあるのだろう。進一郎俳句はシャッターを切るように小気味よく、対象を捉える。俳句は抒情より叙景の詩。そして時間の流れより、瞬間を切り取る。レンズを覗き込む作者の背が見えるよう。

久々の雨万物に節分会
志村 良知

柵檀の実空に満つ廃校舎

川霧に光りの囲む己が影

梅日和駅に急ぐ人愛でる人

富士が嶺に沈む日輪霞濃し

二句目、梅檀の赤い実が空に賑やかさを加えていることが、今は使われなくなった校舎をより静めている。

四句目、梅が咲きだして、ようやく暖かい日が続く。

梅が咲いて、町の日常の風景が少し華やぐ。暖かい日差しが句にあつて、春の訪れを待ち望んでいた人を詠む。

.....

撫で牛の鼻の燦めき初詣

大津 そうかい

バスを待つ吾が影長し春近し

幣揺らし神殿抜くる夏の風

雲の峰俺にも出来しオムライス

蓑虫や終の栖の吾に欲し

撫で牛は昔は商家に祀られていた縁起もの。昨今はおつばら参道にあり、鼻も撫で心地よさそう。牛の像も参拝客に撫でられてびかびか。五句目、仕事一途に来た人生と、支えてくれた家族を語る句と読める。そうかい句は対象を観て、身に引き付け句におかしみを醸す。

小春日やメタセコイアの天を突き
安藤 晃二

ミュンヘンや霧氷灯に映えバブの更け

燦然と明けの明星初詣

夏の田の鉄路ゆつたり大曲

驟雨去りデッキの句ふ立夏かな

二句目、若き日の一シーンであろうか。一幅の絵のよう。

五句目、旅に心誘われる句。俳句は五七五の絵画と言われることを、これらの句を見て再確認した。明けの明星、鉄路、驟雨後のデッキ：句の中に存在感を持ち、風景に出会った記憶を思い起こさせてくれる。

ペン川柳

二〇二五年も事前の投句と投票を行った後、「新宿宮川」で合評会を開催、活発なコメントを交わしながら懇親を深めました。

五月からアキチャン（中村）と呑助（大森）さんが新たにメンバーに加わり、多希（福本）さんも時々参加して、より一層活気のある川柳会になりました。

九月には京都に遠征しました。初日は涼しい貴船で川床料理を楽しみ、翌日は合評会後、明迷（八木）さんの案内で將軍塚等に出かけました。夜は町屋風居酒屋で打ち上げを行い、京都遠征を成功裏に終えました。

年間を通して我々好（浜田）さんが総得票数一位となりました。最優秀句にも五回選ばれました。二位は僅差で火酒（三春）さんが付けました。火酒さんは三月に月間得票数一位を獲得しました。

三月と十二月には、長らく欠席だった酔雅（西川）さんが復帰しました。

【我々好】

ウイスキー

（浜田 道雄）

- 「待」…ちょっと待てあと三分で五割引
- 「張」…見栄張って損してなおも意地を張る
- 「逃」…逃げそこねどうとうお前と暮らす羽目
- 「盗」…伝統芸盗み上手が功労者
- 「黒」…米寿過ぎ喪服の出番グツと減り

ここに掲載した五句すべてが月間最優秀句に選ばれました。他に三句が優秀句に選ばれましたから、計八句が秀句だったことになります。総得票数一位は二年連続です。「待」は物価高の折、生活実感に溢れていますね。「逃」は読み手は色々に解釈しそうですね。「盗」の芸は「盗まなければ」名人になれません。

【火酒】

ウオッカ

（六戸 三春）

- 「生」…トイレ列よくぞ男に生まれけり
- 「変」…内科外科サロンと化していま「老科」
- 「変」…パスワードまた変更でノイローゼ
- 「逃」…長命や先立つ金に先立たれ

「浮」…老いてなお流す浮名の二つ三つ

最優秀句は二句、優秀句は九句選ばれ、総得票数二位となりました。特に三月の「変」では合計得票数十五と抜群の成績を残しました。「生」では、殆どの川柳子は男性の句と思っただそうです。見事に騙されました。老人や人生の機微も巧みに詠んでいます。「浮」はやはり若さを保つ秘訣でしょうか。

【明迷】

(八木 信男)

「伸」…もう終われ欠伸花咲く会議室

「縁」…Aーに良縁問えばフリーズし

「盗」…持ちネタを師匠に盗られ泣き寝入り

「刺」…大谷を二度刺したぞと蚊が自慢

「叩」…叩き台二転三転元通り

最優秀句は三句、優秀句は四句と秀句七句が選ばれ、総得票数も第三位に付けました。お題の「伸」を「欠伸」としたのが秀逸です。「縁」は面白い発想ですね。「盗」は「得意先上司に盗られ泣き寝入り」の作者案もありま

した。「叩」は会社でも良くあることです。会議は「ガス抜き」のためだったのででしょうか。

【呑助】

(大森 海太)

「縁」…爺ちゃんはカネと女に縁が無い

「張」…宵っ張り坊さん達が根くらべ

「浮」…今日もまた出るものが出ず浮かぬ顔

「叩」…まだいける！尻叩かれて狂い咲き

「黒」…素人が玄人ぶって赤っ恥

活動期間八ヶ月にも拘わらず、総得票数で四位に付けました。「浮」は最優秀句でした。元句「春寒し小は漏れ出し大は出ず」をもじりました。「張」はこの頃教皇選挙の「コンクラーベ」を上手く川柳に取り入れました。「叩」は色々に想像できますね。

【だ々々】

(塚田 實)

- 「張」…年経ても見栄張る余裕持たないね
 「逃」…夢の中追っかけられて逃げ切れず
 「浮」…宮仕え上司選べず浮き沈み
 「刺」…気をつける綺麗な花は刺とげがある
 「叩」…肩叩き昔上司で今は孫

「張」は、いつまでも見栄を張るくらしいの余裕を持ちたいとの願望です。「逃」は、夢で失敗や逃げ切れないとき、いきなり目が覚めて大汗をかいているという経験はありませんか。「浮」は、会社で上司は選べませんが、上司によっては評価が浮き沈みし、悔しい思いをしたことがあります。バラはとても綺麗ですが、刺もありです。美女には時々刺があります。「叩」は、孫は小さいときは喜んで肩叩きしてくれましたが、成長すると難しくなってきました。

【いななみ】

(稲宮 健一)

- 「待」…待つ間なしセクハラ記事で大忙し
 「逃」…逃げ口上上手い政治屋長老に
 「浮」…八十年沈んで浮いてまた沈む
 「刺」…妙齢の目線に刺され歳忘れ
 「黒」…白熱の黒の叫びがジャズを生む

「刺」は最優秀句に選ばれました。色気はいつまでも持っていたいものです。「待」は、昨年一年を通してセクハラ事件が後を絶ちませんでした。特に週刊誌は大忙しでした。「浮」は、最後が「沈む」で終わるのは寂しいですね。「黒」は作者のニューオーリンズでの経験を詠んだものです

【てあつぐ】

(安藤 晃二)

- 「縁」…因縁と諦めてこそお付き合い
 「張」…伸子張る母の手捌き大蛇揺れ
 「逃」…出世道上司に逃げ道用意する
 「浮」…ボルカ舞う「浮気心」やシユトラウス

「盗」…至福なり酒盗で一献女将注ぐ

「縁」は、相手もそう思っているかも知れませんが。

「張」は、懐かしい昭和の景色を思い起こします。「浮」は、作者が音楽に造詣が深いことを示しています。「盗」を「酒盗」としたのは良い発想ですね。女将とのやりとりの情景が浮かんできそうです。

【零門】

(松谷 隆)

「変」…温暖化ついに青背も高級魚

「張」…関税は俺のものだと大威張り

「逃」…聞かずとも想定できる逃げ口上

「浮」…オーラスで役満振ってトップ消え

「叩」…Aーの指示で上司の肩叩く

「変」と「張」は優秀句に選ばれました。「変」は温暖化と潮流の変化でサバやアジなど青魚市場は大混乱でした。「張」のトランプ関税の行方は日本経済にも多大の影響を与えています。「アメリカ第一主義」は、貿易による相互依存からの大変換です。「叩」で、A Iをどの

ように制御するかは、人類先行き共通の大命題です。

【アキチャン】

(中村 晃也)

「縁」…女房を「遠縁の人」と紹介す

「浮」…川柳は浮かばれぬ奴のつぶやきか

「盗」…恋心盗み盗まれまだ独身

「黒」…思い出す粹な黒塚乱れ髪

「黒」…公私とも黒子に徹し今日がある

五月から川柳会に参加しました。「盗」と「黒」「思い出す…」で優秀句に選ばれました。「縁」では紹介した後、家に帰って奥様との関係はどうなったのでしょうか。「浮」は厳しい指摘ですが、その通りかも知れません。「黒」の「黒塚」は春日八郎の「お富さん」を思わせ、更に「乱れ髪」は情景に興味をわかせる、想像が膨らみますね。

【多希】

(福本 多佳子)

「盗」…年寄りの寸暇を盗むスマホかな

「刺」…解凍の刺身が並ぶ海辺宿

昨年は四回の参加でしたが、優秀句に二句選ばれました。「盗」で、最近ではスマホに嵌まる年寄りも増えたそうです。時間があるので、徹底的にのめり込む恐れもあります。「刺」では、温暖化と潮の流れの変化で、漁獲量に変化、新鮮な魚が売りの海辺宿も、よそで仕入れた冷凍魚を使っていることもあるようです。

【だし】

(大野 暁)

「待」…その手待てそれ反則だ目が覚めた

「変」…トランプがお見事でした七変化

「張」…傘張りの浪人暮らし板垣は

「逃」…もう年だ開き直って前を向く

「浮」…浮動票どこまで信じてよいのやら

昨年は八回の参加に留まりました。「待」は優秀句に選ばれました。「張」は、板垣退助の話ですが、清貧の

イメージが「傘張り」に繋がったようです。「浮」は、

最近の国政選挙では浮動票の行方が選挙結果に反映しているようです。ださんの句は説明を聞くと、成る程と感心する句が多くありました。

【酔雅^{すいが}】

(西川 武彦)

「変」…変わるのは老妻の肌しわだらけ

「黒」…白よりも黒多かった我が人生

昨年は二回参加しました。「変」は、優秀句に選ばれました。変わるの自分もそうではないでしょうか。

(世話人 塚田 實)

ペン・フォト句会

令和七年も例年通り、八月を除く毎月、代々木駅近くの会場に集まり、「付け句」と「自由句」の合評会を行いました。

「付け句」は、予め当月担当から示された「お題写真」に基づいて、各メンバーが二句ずつを提出しておきます。句会当日、全句の中から各々が投票し順位を決めた上で、各句の批評や議論をする、という方法で行っています。

今年度のお題と出題者は次のようになりました。

- | | | |
|-----|----------------|----|
| 一 月 | 日本武道館・矢沢永吉シヨウ | 清水 |
| 二 月 | 明治神宮の夜の電飾 | 長尾 |
| 三 月 | インド・タージマハル | 中村 |
| 四 月 | 夜の公園の電話ボックス | 新田 |
| 五 月 | 新宿サザンテラスにて | 松田 |
| 六 月 | 高知漁港でのカツオのタタキ | 矢澤 |
| 七 月 | 国立市大学通り沿いの立葵の花 | 安藤 |

- | | | |
|-----|-----------------|----|
| 九 月 | 相模原のJAXAの展示ロケット | 清水 |
| 十 月 | 街の祭りの神輿 | 長尾 |
| 十一月 | 田んぼの藁ポッチ | 中村 |
| 十二月 | 新宿中央公園の池から滴る水 | 新田 |

「自由句」は文字通り、各自が好き好きに撮った写真とその付け句を、A4版に纏めて持ち寄り、壁に貼り出して投票と批評をするという方法で行っています。自由句の一部は本号の表紙裏などに掲載しています。

句会の終了後は、当月の幹事が選んだ店で夕食会を行って親睦を深めています。今後も和気あいあいの活動を続けて行きたいと思います。

見学参加や夕食会だけの参加も歓迎です。九月には前メンバーの三春さんが飛び入り参加されました。なお大変残念ながら、永年メンバーとして活躍された大越浩平さんが、三月にお亡くなりになりました。心よりご冥福をお祈りいたします。

(プロマネ 松田昌康・長尾進一郎)

英語を読もう会

句の情報、論説の紹介を旨とし、メンバーの提題により読む。

開催月	題 名	担当名
1 月	Trump is already winning his war against Federal Reserve Natasha Sarin: イェール大教授、FRB 批判のトーンの論説だが FRB は政権と旨くやるだろうと結ぶ。	安藤
2 月	The U.S. must avoid isolationism, a path to nowhere Max Hastings、トランプ政権への警鐘。	安藤
3 月	Warren Buffett says US should "spend wisely", plans to increase investment in Japan 日本の金融市場への期待。	安藤
4 月	The nonsense behind America's trade war The Washington Post editorial board、トランプ大統領による「相互関税」発表直後の米紙ワシントンポストによる社説	安藤
5 月	Buffett's Life Advice May Be More Valuable Than His Portfolio バフェット氏の賢人振りを称賛、金儲けより優れていると。	安藤
6 月	Donald Trump has many ways to hurt Elon Musk. The incentives for Mr Musk to make up with the president are powerful June 6th 2025、ドナルド・トランプにはイーロン・マスクを困らせる種々の 手段がある。マスク氏には大統領と仲直りの思いは強い。	安藤
7 月	How to strike a trade deal with Donald Trump. Vietnam is the latest country to secure concessions. 「世界的軍備増大は世界経済をどう変えるか」と「トランプ関税の合意に達したベトナム」	安藤
9 月	Details of Japan-U.S. Tariff Agreement Disclosed in Joint Statement Memorandum of Understanding 米国関税問題、日米共同声明と覚書	安藤
10 月	Sanae Takaichi set to become Japan's first female prime minister Shaimaa Khalil: ロイター記事、日本初の女性首相	安藤
11 月	UN has failed to evolve Richard Haase: NY 大教授、国連が無意味な存在に転落していく流れは、弱まっていない	安藤
12 月	Takaichi's bag 評判の高市首相初登庁に携行した黒皮の手作りバッグ	安藤

何でも読もう会

三月からは会場を門前仲町『すぎ田』変更しました。
十二時開催で、地酒が揃い、季節の料理が楽しめます。

【二月】

・『蝸ノ木』

葉室 麟

武士の生き様が見事に描かれた作品。

【二月】

・『墨東綺譚』

永井 荷風

昔の向島の風情や雰囲気が細やかに描かれる。

【三月】

・『プラスチック』

井上 夢人

ミステリー風小説。多重人格がキイワード。

【四月】

・『そしてバトンは渡された』

瀬尾まいこ

三人の父と二人の母。そんな中で成長する優子。

【五月】

・『死者の書』

折口 信夫

難解ではありますが、阿弥陀浄土へ昇華します。

【六月】

・『一月物語』

平野啓一郎

幻想的な吉野の山で、鴉揚羽に誘われた行先は？

【七月】

・『いつか王子車で』

堀江 敏幸

東京下町の風景や人々の温かさが伝わってくる。

【九月】

・『京都ものがたりの道』

三笠宮彬子

京都の街の魅力と彬子さまの京都愛が誘います。

【十月】

・『青い壺』

有吉佐和子

青い壺の変遷と保有した人の人生が描かれる。

【十一月】

・『吉野葛』

谷崎潤一郎

吉野の地は歴史のロマンを秘めています。

・内容等の詳細はHPをご参考ください。

◆皆さん！『読もう会』にどうぞ。

・飲みながら楽しい時間を！

(プロマネ 清水)

ホームページ関連

ホームページ（以下HP）のアクセス数は、HPが健全に使われているかどうかを診断する重要な指標です。

二〇二四年一月のトップページのアップデートに際して、その主目的の一つである「外部の方たちのアクセス数を増やす効果」を確認するため、既に二〇二二年からアクセス検索を始めていました。

とはいえ、外部と会員のアクセスを区別してデータ採取するのは、犯罪捜査と異なり一般のHPにおいては現実的ではありません。そこで、「会のご案内」「入会案内」「各グループの紹介」へのアクセス数は外部アクセスを示すものと考えました。

アップデート後には、（１）ご案内ページへのアクセス数は著しく増加し、（２）各グループの紹介ページへのアクセス数にも明らかな増加がみられ、特に八〇〇字とエッセイは増加が続いています。以上からアップデートの主目的の一つは達成できたと考えています。

一点気がりなことは、会員専用ページへのアクセス

数に明瞭な減少傾向がみられることです。私見ですが、会員数の減少が影響しているからかもしれません。

具体的な数字を提示すると、毎月のトップページへのアクセス数は二五〇〇から三〇〇〇件くらいで、会員専用ページへのアクセス数は、以前は一三〇〇件ほどだった時期もありますが、現在は七〇〇件程度に減っています。ご案内ページへのアクセス数は、二〇件くらいだったのが八〇件くらいに増えました。一方、八〇〇字作品へのアクセス数は四九〇〇件くらいだったのが一一〇〇〇件くらいに増え、エッセイ作品へのアクセス数は三七〇〇件くらいだったのが七〇〇〇件くらいに増えました。これらの分野でHPの使用頻度が上がったと思われる。

会員の皆様がどの程度HPを使われているか、どういう使い方をされているかは分かりません。面倒だからとできるだけ使わないようにしている方もおられることでしょうか。でも、必要だと感じる方もいらっしゃると思います。そういう方のためにOBペンのHPを続けていきたいと思っています。（HP世話人 松浦俊博）

クラブ活動を振り返って

令和七年（二〇二五年）

（会員の敬称略）

一、役員

理事・会長	吉田 真人
理事・会計担当	長尾進一郎
理事・IT担当	志村 良知
理事・HP担当	松浦 俊博
理事・事務局	児玉 寛嗣
監事	大森 海太

前年に引き続き右記の役員が会の運営を務めた。

しかし、七月に児玉さんが急逝、また志村さんも病気のため業務遂行が一部制限され、総体として活動量が低下した。

二、四半期会の活動報告

一月四半期会（二十三日）

・新年会と新春ギター演奏会

ギターカルテット《アルカンヘル》

五月四半期会（十五日）Zoom併用

・『悠遊』三十二号合評会

七月四半期会（三十一日）Zoom併用

・会員講演Ⅱ荒岡 衛さん

『乗り物雑談』

十月四半期会（十六日）Zoom併用

・ゲスト講演Ⅱ許 俊鋭氏

（東京都健康長寿医療センター・名誉センター長）

『人生百年時代！』

〈健康長寿研究でみえてきた心と身体の健康法〉

令和七年の入退会者

・退会 大越浩平さん（三月・逝去）

・退会 兒玉寛嗣さん（七月・逝去）

福本多佳子さん、浜田道雄さん

宍戸三春さん、吉田真人さん

一杉秀樹さん、塚田 實さん

大月和彦さん、内藤真理子さん

松谷 隆さん、杉浦右藏さん

大野 晃さん、浅井壮一郎さん

・入会 吉原秀東さん（二月）、

下平真理さん（令和八年一月）

・在籍数 令和八年一月三十一日現在 四十一名

令和五年までのコロナ禍で、自宅からオンラインで活動するスタイルが普及して行つた。コロナ終息後も、オンラインは定着し、遠隔地或いは健康面から会場に來れない会員にとってはむしろ参加の機会が増えた。

（前会長 吉田真人）



写真 長尾 進一郎

颯爽と駆け抜けた兒玉さん

「兒玉寛嗣さんを偲ぶ」

瀬尾 勝弘

私の義兄である兒玉寛嗣さんが去る七月八日に亡くなりました。訃報が届いたとき咄嗟に、猛暑による熱中症かと思いました。

ご家族の話では、兒玉さんは亡くなるその日まで元気にしていて、奥様が外出から帰宅したときに倒れているのを発見して救急車で搬送されたそうです。病院の医師の説明では、虚血性心不全で苦しみますに静かに旅立ったとのことでした。

兒玉さんは、OBペンクラブで積極的に活動されています。彼の妹の夫である私は、彼に会う度にクラブの会員になることを勧められて、昨年六月に入会しました。『悠遊』32号に初めて投稿し、会員としての最低限の務めを果たせたと思っていたところでした。

彼から昨年六月に送られたメールに「何でも書こう会、掌編小説勉強会、サロン21、英語を読もう会に参加しています」と書かれていました。クラブの事務局業務など、精力的に活動している様子が、定期的に届く本クラブの各種

行事の連絡から窺えました。

亡くなる二日前に書かれた「何でも書こう会」への投稿作品も読むことができました。「新しい航路」というタイトルで北極海航路の今後の発展について歴史を振り返って考察した作品です。彼の作品は、エッセイでも掌編小説でも、背景の描写が細やかで、いずれのテーマでも、あまり一般的には知られていない内容にも触れており、その博識ぶりには目を見張るものがあります。

それぞれの作品の結末は意表を突くようなものではなく、いずれも穏やかな形になっています。この「兒玉スタイル」は、この度の突然の人生の幕引きと通じ、誰からも愛された彼の人柄がよく現れていると思えます。

ご冥福をお祈りします。

合掌



祇園前 笑みを浮かべて 逝きし義兄^{あに}

タッタタッタ かすかに聴こゆレールの音^ね

小倉祇園の太鼓の響き

義兄^{あに}逝きて集いし人と語り合い

縁引き^{えんひき}継ぐ子らを見守る

昨年のクラブ活動より

OBペンの講演は面白い

7月 荒岡 衛氏 「乗り物雑談」(飛行機を中心として)



- 1 小さい頃はバス
- 2 飛行機に興味を持ったきっかけ
- 3 交通関係の記録付け
- 4 飛行機の搭乗記録
- 5 搭乗時のこだわり
- 6 ファーストフライト・ラストフライト
- 7 少し変わった乗り物の体験

沖縄 下地島空港

荒岡氏は飛行機が好きで、大学では航空学科に進むが、会社では火力発電用ボイラ設計を行い趣味で航空機の写真撮影や搭乗を続ける。1972年以来2581回搭乗し機体銘板写真を含む詳細記録を残している。ちょっとマニアックな講演に、皆さん聞き入った。



10月 許 俊鋭 先生 東京都健康長寿医療センター名誉センター長 人生100年時代！～健康長寿研究でみえてきた心と身体の健康法～



許先生の略歴：1974年東京大学卒業、三井記念病院外科入局。ハーバード大学医学部研究員、埼玉医科大学第一外科主任教授を経て、2007年に同大学名誉教授。東京大学特任教授を務めた後、副院長として東京都健康長寿医療センターに赴任し、2015年より2024年まで同センター長。専門は心臓血管外科一般、補助人工心臓治療、心臓移植治療で高度な心臓外科手術のエキスパート



座談会では会員から高齢者らしい話題も出た

- 「高齢者は老化予防・虚弱(フレイル) 予防に努め、自然な生活を送るのが良い」
- 「高齢者になって人生の目標がはっきりしなくなった。高齢者の生きがいとは？」
- 「不整脈は生じている時のデータが必要。スマートウォッチなどの常時監視も有効」

OBペン会員は散策好き、飲み会も大好き

世田谷散策の会 3月 大津さん企画

松陰神社前駅 → 松陰神社 → 世田谷城址 → 豪徳寺 →
宮の坂駅 → 下高井戸駅 → 打ち上げ（焼鳥屋・「鳥たけ」）



大久保界隈の散策会 6月 中村さん企画

新宿の都心、木立に囲まれてゆったりした場所。西向天神宮では、氏子総代だった中村さんのおかげでVIP扱いのもてなしを受け、新宿山の七福神を巡り、久左衛門坂、箱根山からの絶景を楽しむ。



自然観察会 国営昭和記念公園 11月 安藤さん企画

晴天に恵まれた温かい日、安藤さんの絶妙な計画によりちょうど見頃の銀杏並木や紅葉の絶景を愛でながら広い公園を散策。日本庭園からパークトレインにも乗る。「鮭松」で美味しい鮭と銘酒をいただき大満足。



会 員 名 簿 (五十音順)

氏 名	主 な 活 動 分 野
荒岡 衛	書こう会、エッセイ
安藤 晃二	書こう会、エッセイ、英読会、俳句、川柳、フォト句
池田 隆	書こう会、エッセイ、サロン21、読もう会、写真
池松 孝子	書こう会、エッセイ
市川 忠夫	書こう会、エッセイ、英読会、サロン21
稲宮 健一	書こう会、エッセイ、川柳
上田 信隆	エッセイ、サロン21
宇敷 辰男	書こう会、エッセイ
内田 満夫	書こう会、エッセイ、会員談話室
大津 隆文	書こう会、エッセイ、俳句
大塚 喜子	掌編小説、書こう会、エッセイ、読もう会
大平 忠	書こう会、エッセイ、サロン21、会員談話室
大森 海太	書こう会、エッセイ
川口 ひろ子	書こう会、エッセイ
木村 敏美	書こう会、エッセイ、絵
荒野 <small>つひや</small> 喆也	書こう会、エッセイ
清水 勝	掌編小説、読もう会、フォト句
志村 良知	書こう会、エッセイ、読もう会、俳句
下平 眞理	書こう会、エッセイ、読もう会
下山 健夫	エッセイ、サロン21、英読会、フォト句
瀬尾 勝弘	書こう会、エッセイ
豊澤 幸平	書こう会、エッセイ
長尾 進一郎	書こう会、エッセイ、俳句、フォト句、写真
中村 晃也	書こう会、エッセイ、俳句、フォト句、写真、掌編小説

氏名	主な活動分野
西川 武彦	エッセイ、掌編小説、サロン21、川柳、写真
西川 知世	俳句、エッセイ
新田 由紀子	書こう会、エッセイ、読もう会、俳句
野上 浩三	書こう会、エッセイ、掌編小説
野瀬 隆平	書こう会、掌編小説、サロン21、読もう会、英読会、写真
馬場 真寿美	書こう会、エッセイ、掌編小説
浜口 須美子	エッセイ、俳句、写真
原田 信	書こう会、エッセイ、会員談話室
藤原 道夫	書こう会、エッセイ
松浦 純子	書こう会、エッセイ
松浦 俊博	書こう会、エッセイ
松田 昌康	フォト句、エッセイ、俳句
宮原 由利子	俳句、読もう会、エッセイ
森田 晃司	サロン21、英読会、エッセイ、俳句
八木 信男	エッセイ、川柳、絵、会員談話室
矢澤 正二	エッセイ、フォト句、写真
吉原 秀東	書こう会、エッセイ

(2026年1月31日現在)

▽昨年末に十名あまりの会員の方が、OBペンクラブをおやめになりました。それぞれご事情があつてのことだと思えます。従つて残念ながら、『悠遊』も昨年よりは薄い冊子になってしまいました。投稿してくださったおおよそ三十名の方には本当に感謝、感謝です。二千字近くの文章を書くということは、論理的なものごとを考える訓練になり、さらにそれを言葉に表していくことは、総合的な刺激を脳に与えることになるのではないかと考えています。過去のことを思い出して書く、これから先のことを書く、また自分の関心のあることを書く、どれをとつても脳にとつて若返りのチャンスだと思つていきます。(松浦 純子)

▽今回初めて校正の作業に携わり、いろいろ勉強させていただきました。以前やったことがある技術論文の査読とは異なり、分野が多岐にわたるため内容を理解していないことについてチェックすることは難しかったです。それでも微力ながら編集に貢献できてほつとしています。また漢字、送り仮名、カタカナ表現など自分の理解不足な点があり、何年ぶりかで国語辞書(大辞林)を利用しました。可能な限りインターネットを使わないで辞書を使うと調べる対象以外のことも目に入り、紙媒体の良さを再認識しました。

(荒岡 衛)

企業OBペンクラブ同人誌

『悠遊』第三十三号

二〇二六年四月一日発行

発行者 企業OBペンクラブ会長

豊澤 幸平

印刷所 新灯印刷株式会社

東京都新宿区水通町二一五(〒一六二〇八一)

TEL 〇三―三三六〇―九二六一

連絡先 企業OBペンクラブ事務局

松浦 純子

Eメール: obpenclub@outlook.com

クラブURL: http://www.obpen.com

入会案内はクラブURLホームページの「入会案内」

見学希望・入会希望は事務局まで

口座 三菱UFJ銀行海老名支店(409)

企業OBペンクラブ(普通) 1086096

大樗
生命力に神宿る

清水 勝



地球をば
串刺にして食らう

大越 浩平



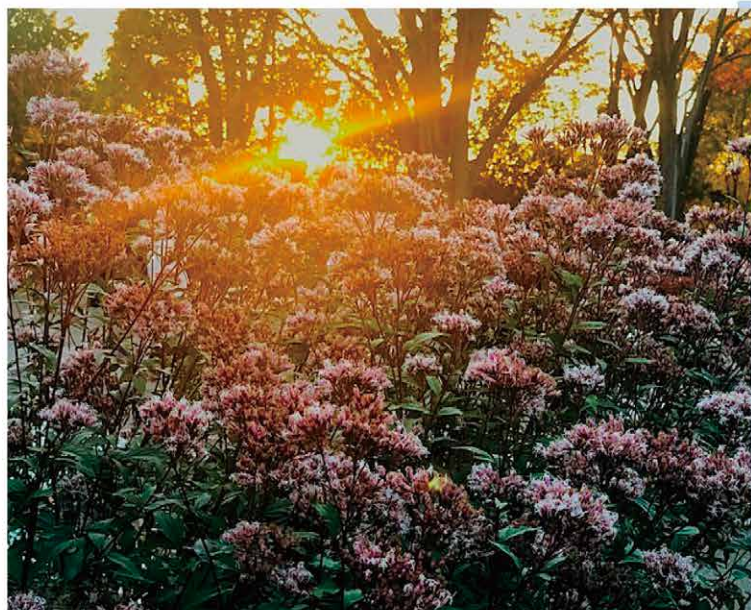


迷いみち

吾を導くは

八咫鳥

三 春



夕日差す

原に名残の

藤袴

安藤 晃二

国後を

望む峠で

なに語る

松田 昌康



電飾や

誰が撮っても

良く撮れる

長尾 進一郎





木村 敏美



瀬尾 勝弘

安藤 晃二



八木 信男

